家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第八十三巻第九号
日本幼稚園協会

9

お茶の水女子大学
昭和
59. 9. 7
附属図書館

幼児のための発表会
その準備と進め方

館　紅・著

新刊!!

子どもの小さな遊びから、劇遊びへと展開させるコツがよく分かる。

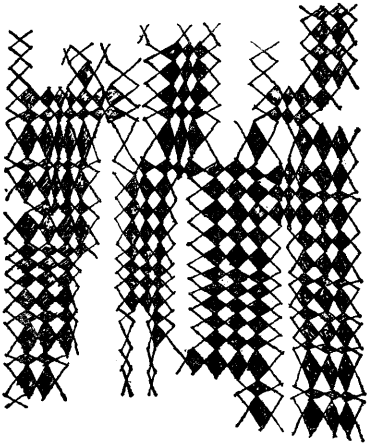
「発表会」を成功させるための基本的な考え方を、紹介しています。
発表会が子どもに与えるよい影響、上手な保育への対応の仕方、保育にもたらす利点、及び出演種目の決め方、脚本の選び方、練習スケジュールの立て方など、著者の脚色による劇遊びの脚本９編と共に解説されています。

Ａ５判・216頁・定価1,500円

＜わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心を大切にする
キンダーブックの　フレーベル館

幼児の教育



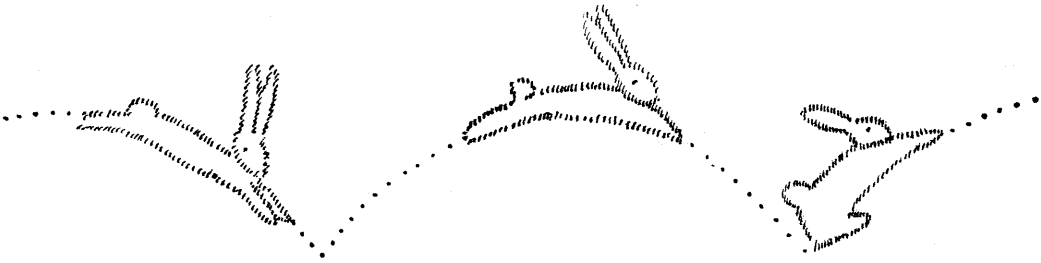
第八十三巻　第九号

幼児の教育　目次

――第八十三巻　九月号――

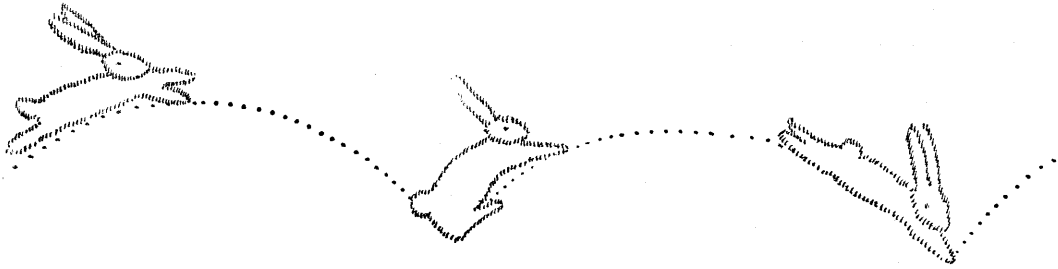
専門職としての保育者……高橋さやか…(4)
本当の引っ越しまでの「大きなおまけ」……赤羽美代子…(6)
私の保育……田口玲子…(11)
歌の中から……長谷川冴子…(18)
園長室の窓から　園長と移動……原口純子…(23)
養護学校の日日
学年末から新学年度へ……津守　真…(26)

© 1984
日本幼稚園協会



いろいろなことを教えてくれる子どもたち（五）……村石京子…（34）
私の幼児教育論……亀井観一郎…（38）
——鏡のたわむれの中で、ひとは無限に表面にいる——
アメリカと日本の幼児教育を見学して……劉　青霞…（44）
兎園随筆①
黄色い兎……蕪木寿江…（48）
ニュージーランドにおける就学前教育の
歴史ならびに現状（十）……松川由紀子…（56）

表紙・安井　淡
表紙題字・比田井和子
カット・福田　理恵



専門職としての保育者

高橋　さやか

保育――乳幼児の教育、また、生活において当然に保護をうける権利をもつ、ハンディキャップを負って生きる心身障害児の教育について、現場の実践に責任を以て当る者、保育者。その保育者の専門性はしばしば問われるところであり、また専門職として何を学び、如何に訓練されてその専門家としての能力を身につけるかについても、重々問題にされているところである。ことに、転職者の免許のあり方が見直され、幼稚園教育要領の改訂もとりあげられようとしている現時点で、専門職としての保育者はその存在意義を、一通りならぬ様々の視角から注目され見定め直されようとしている、……それはぬきさしならない現実として認められよう。

しかしながら、制度上、あるいは実質上、それぞれの当事者がそれぞれの立場から、とりあげたり新しい規定を公示したり、解説したりされるであろうが、その実、保育及び保育者が、真実、正当適切なあり方を確立確保できるか否かは、遺憾ながらあまり期待できないように思われてならない。

保育のいとなみにとって、何をおいても必要なこと、いとなみをいとなみとして成立させ得る一事は、対象者を生かし発育発達させることである。それは、対象者を理解し、対象者に適正に対応することなしには為し難いいとなみである。

端的に言って、保育者は、何の専門家であるか、保育という仕事は何をする仕事か、といえば、子どもを理解し、子どもとよき対応をすることの専門家であり、子どもを理解すること子どもとよき対応をすることこそがその仕事――専業である、と言い切ることができると考える。

保育者は、体力にも恵まれ、音楽やリズム・舞踊などにかかわる才能、造形の分野の才能をもち、話

術も巧みでちょっとしたタレントなみに演出技力もあり、その上、理科の分野の相当巾ひろい知識ももち、社会性も円満調和的で節度を弁え、常識豊かで作法も心得ている、……まあ、これだけ兼備することもなみ大ていではないが、しかもなお、これらのことに相当にすぐれていたとしても、所詮どれ一つをとりあげても専門家というには及び難い程度であるし、まして、これだけの分野全面にわたって専門家といわれるほどの実力はとてものことに身につけられるはずがない、従って、保育者とは、どうも専門性稀薄なんでもやであるにすぎない、……世上一般の保育者観は、大方、このようなところではないだろうか。母親の代現者であれ、とか、愛の補給者であれ、とか、そのような言われ方もあると思うが、一見きれいごとに聞こえるようでいて、代理・補完の役割なり、とりもなおさず本職の専門家は、他にいる、ということになる。

はっきり言えることは、母親であることは現代では、子育ての専門家であるという意味を失っている、ということである。少くとも子育てのいとなみのすべてを負う専門家ではあり得ない。子どもを生めば誰でも母親になる（である）が、今日では、生みさえすれば育てられるようになる、と保障されるほど、子育ては単純容易ないとなみではなくなっている。子どもを育てるためには、子どもが育つ、という実態をそれこそ専門的に理解し、その成長発達の可能性をできるだけ害わず、できるだけ高めなければならない。育つ力はもちろん子ども自身のものであるが、それを強め高めるものは、子どもが対応し、子どもに対応する、生活の、成長発達のための共同者なのである。そして対応の代表的な活動が遊戯活動である。その意味で昔から言われてきたように、保育者は、子どもとよく遊ぶことにおける専門家でなければならない。それはまた、「我らをして子らに生かしめよ」と呼ばわった先達の足あとをたどることでもある、と言うことになるであろう。

本当の引っ越しまでの「大きな　おまけ」

赤羽美代子

私の勤務するR園は、1984年2月3日（行くわよ、兄さん）の日に移転しました。

当日は、兄さんの日にも関わらず、兄さん抜きの、しかし、兄さんより頼もしい、園児の父母様方の力と汗の大活躍の日でした。

R園の位置する場所は、10数年前よりA・R・K計画（赤坂・六本木地域総合開発）事業が進められ、1983年には、いよいよ園舎の周囲一帯は、家屋破壊の作業が開始されました。

毎日、バリバリと無惨に倒される大小、様ざまの木々を、登園、降園時に目にする園児たちは、怒りを身体一ぱいに表わし、「先生！神様が大きくして下さった木を、倒すなんて、もう許さない！」

T夫も「そうだよ。Gちゃん（自閉症児）だって、

だまっているけど本当は、心の中で怒っているよねー先生」

そうした或る日、年長組の男児Sが「北方、領土を返せー」と、片手に拳を握って振り上げ、大きな声を張り上げました。Sの周囲の子どもたちも、Sの様に片手を振り上げ「ホッポーリョードヲ、カーエーセー！」（・は特に力が籠る）リズム正しく連呼するのです。私はSに聞きました「Sちゃん、北方領土を返せって、どんな事なの？」　S「僕たちは、木や草を倒したり、幼稚園を壊しに来るおじさんに『幼稚園や木を返せー』と、云ってるんだ」と、無念そうに、私の目をじっと見つめます。木陰で一と休みした時の、あの風の音、木の葉のおしゃべり、草や木と共に生きた日々が思い出され、Sはだまっていられないのです。

数日後、園舎前にT建築会社臨時事務所が建ちました。Sと友人たちは、降園時には、決まってT事務所の前に立ち、例の「北方領土を返せー」が始まります。T事務所のおじさんたちも、幼ない子どもたちの連呼に合わせて「北方領土を返せー」と片手を振り上げて答えてくれるのです。

周囲の家屋を破壊する時の大揺れが、園舎に雨漏りをプレゼントしてくれました。そのダイナミックで力強い雨漏りは、昨日はあちらドドドー。今日はこちらザザー。教師と園児は両手に容器を抱え、天上を睨み〝えりまきとかげ〟さながらの足つきで、園舎内を馳け巡ります。その、姿のおかしさに、教師も子どもたちも、お腹を抱えて大笑い。部屋の戸は錆びつき、どんなに戸びら様にお願いしても動いてくれません。馴じみ深い園庭の遊具類は、先に移転先に行ってしまい、園庭も寒ざむとなりました。陽気症候群ぎみの教師たちですが、夕方になると、佗びしさ、淋しさを同事に味わう時を迎えました。

5分程先の、大きなホテルに隣接して、仮り住まいのプレハブ園舎が建てられました。

移転先の園庭は「都内には珍しく、緑がいっぱい

ですね」と、関係者は目を見はります。総面積１３４５坪の土地に、３８８坪の幼稚園舎（教会学校室も含む）が建ちました。

この緑の土地は、本当の引っ越し迄の大きな、大きなおまけだと思っています。

先ず、かつて、この地に繰り広げられた、優雅な歴史を紹介いたしましょう。

周辺の人びとは此の所を〝田中山〟と呼びます。明治時代に生糸で大変な成功をした、田中糸平氏の屋敷後で、かつては、現在の４・５倍の広さを持った土地であったそうです。広大な庭園には東海道五十三次の景色を形取り、当主は、お駕籠に揺らり、揺らりと揺られ、お庭の散歩を楽しまれたそうです。又、園舎の隣りには、格調高く、気品を保った洋館と純日本屋敷が、古色蒼然と鎮まって建っています。明治の初期に建築された、Ｏ子爵の屋敷です。その屋敷の内部は、柱一本に至る迄、きめ細かい細工が繊細にちりばめられ、施され、その美事さに、声を飲み目を見はります。明治天皇の、時どきの、お出ましがあり、練瓦造りの古い馬小屋が並んでいましたが、今回壊されました。田中氏はこの屋敷を買い求め、客用の建物として用いました。その隣りに田中氏は、Ｏ子爵邸に劣らない屋敷を構えました（田中邸が、そのまま幼稚園として活用する話もあり、夢は枯れ野を馳け巡りましたが、都合により、田中邸は壊され、現在のプレハブになったのは、残念！）

年月は過ぎ去りました。田中邸の広大な土地は、その後、幾つにも分割売買され、それぞれの大きなビルが建ち並びました。Ｏ子爵邸も、幼稚園舎・教会が建つこの土地も、数社の所有土地となりました。

園舎は、広い芝生に面し、古木の木々に囲まれています。庭の一隅には川の流れの後があり、大きな一枚石の橋が掛っています。古い五重の塔は、贅を尽くした昔の物語りを胸に秘め、静かにリンと建っ

ています。この一隅は、五十三次の何処の景色を形どったか、誰も知りませんが、子どもたちは、木の香が薫り、薄暗いこの場所を、小さな森と呼んでいます。更に、この森の奥へ入ると山中の細い身を思わせる、文学散歩の様な、ちょっとした下り道もあるのです。子どもたちは、この道を、トットトと下ると、今度は山の崖や又、力強く落下する水の音が、今でも聞こえてきそうな涸れた滝を、よじ登ります。

子どもたちにとって、この小さな森は、森の木と、鬼や天狗が仲良く互いに生かし合って存在している、聖なる空間なんです。

又、或る日、園児たちは先生に連れられて、庭から通じる（普断は禁止されている）散歩道を歩きました。都心にしては、大変静かな、大きなビルの裏道です。年少児は、年長組のお兄さん、お姉さんに、しっかりと手を繋がれ、初めての散歩道に緊張をしました。4分程度歩くと、道は緩やかな曲り道となり、正面の視界が急に広がります。大きなビル群が重なり合う、一幅の絵のような景色は、幼児にとって、向こう側の世界を、こちら側の世界から眺めている気分になったようです。

又、ぐるりと後を向いて、緑の園庭に戻りました。次は二階に通じる、外からの非常階段（普断は用いない）を登り、二階を通過し、屋内の階段を降り、礼拝堂を通過して、園舎に戻りました。その間、全部で15分程の散歩でしたが、子どもたちは「先生、私、何処を歩いたのか、ちっとも解らない」「僕も！」と、話し合っています。

やっとお部屋に戻りました。全員、横になり一と休みしながら、教師の語る〝瘤（こぶ）取り爺さん〟の昔話しに耳を傾けました。「お爺さんの瘤を、鬼はエンヤ、エンヤと引っぱりました。とうとう瘤は、すぽんと、とれてしまいました」　いつもなら、E夫、D介が抗議します「へえー、瘤なんか引っぱってとったら、血だらけだよ」「お爺さん、歩いて家へ帰

れないよ。救急車呼ばなきゃー」しかし、今、自分が経験した、ちょっと不思議な感覚の出来事で、昔話の世界を、抵抗なく受けとめているようです。

緑いっぱいのこの園庭に、雨・雪が遊び舞います。陽光も、木の間を漏れて、ステンドグラスの欠けらの様に降り注ぎ、小さな森の息吹きを称えています。

本当の引っ越し迄の間の、この大きなおまけを、今、子どもたちは、植物や虫たちと生きる、確かな生活を味わっています。

一年後に引っ越す新園舎の庭は、本当に狭く、遊ぶどころか、そぞろ歩きの猫の額です。引っ越しの日には、教師も片手を天に振り上げて「北方―領土を―カーエーセー！」と連呼して、大きな大きなおまけの、小さな森と芝生にお別れを告げる事になるでしょう。

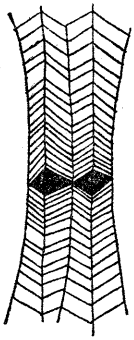
皆様

赤坂方面にお出かけの時は、お立ち寄り下さいませ。この小さな森を散歩し（3分程度で終る）深呼吸をしてみませんか？

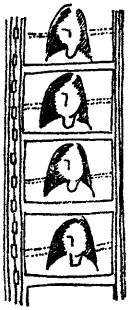
こんな小さな森でも「ああー、良い森だなあ」と身も心も、ゆったりとして森林浴にひたって下さい。

お待ち申し上げております。

（東京・霊南坂幼稚園）



私の保育



田口玲子

「あっ、せんせいきてる。きててよかった。」と飛びはねるようにして部屋に入ってきて、ひょいと私の顔をのぞき込んだのはTくんだった。二月初め、私は一週間ほど休んでいたのだった。前日、映画会ですでに会っていたのだが、お部屋で言ってもらえるとまたうれしい。「先生、やっぱりいる方がいい？」と、私も思わず顔がほころんでしまう。自分が必要とされることは、なんて張り合いのあることかと改めて思う。「それにしてもTくん。大きくなったなあ。」その朝は、Tがひとまわりもぐんと大きく見えた。明るい光の中できらきらしているTの笑顔を見つめていると、ふっと四月の頃のことが思い起こされた。……思えばこの一年、Tとの間にはいろいろなことがあった。

四月の第一日目の朝。「さくらぐみにはいるのいやだ。すみれ（三歳児クラス）のほうがいい。」と玄関にしゃがみ込んでいたTは、しょぼしょぼと小さかった。「Tくんもう四歳なんだから。さくら組のお友だちと仲良くなろうよ。」などと言っても首を振って泣くばかり。自分のことばがひどく空しく思えたものだった。

ところで、登園はすぐに何でもなくなったが、今度はお帰りの時間が問題だった。「あっ。またTくんがいない。」お帰りが近づくと、私は緊張したものである。身じたくにも手がかかり、まだじっとイスにも坐っていられ

ない二十四人の子どもたちを、部屋に残してTを呼びに園庭へ行くと、Tは悠然とブランコの上。何を言っても、私の声はTの前を素通りしていくだけだった。

ある日、呼んでも「いやだ。」というTに、「どうして？」と聞くと、「だって、せんせい。よびにくるの、はやいんだもん。Tくんもっとあそびたい。」と小さな声が返ってきた。登園してから帰るまで、自由に遊べる時間はたっぷりあるはずなのに、Tは遊んだという実感が得られていないのである。心が満たされていないのである。保育後、その日のTとのやりとりを振り返ってみた。

……午前中、三階の年長の部屋で歯科検診があった。Tは部屋には来たが、検診を拒んだ。小屋のウサギに餌をやりながら、Tはのんびりと「たべてる。」とそばにいた私に話しかけてきたが、私は「もういいかな。もういいかな。」とTを連れていくことばかりを考えていた。Tは一番最後にやっと検診を受けた。やってみれば何でもない。「できたじゃない。」と声をかけると、Tは部屋にあったブロックのロボットを触わりながら、ぼそぼそと「これね……」と話し始めた。けれど私は、その瞬間には、先に降りていった子どもたちのことに頭がいってしまい、話を聞き取ることすらできなかったのである。

……また、その午後は、相変わらずお弁当箱を出しっ放しのまま遊びに行ってしまったTを探しに園庭へ出てみると、Tはたいこ橋の上からマットに飛び降りる遊びに夢中だった。仲間の中で、いつになくのびやかだった。近づく私にTは、「せんせい。みてみて！」と盛んに呼びかける。ところが私は何ということをしてしまったのだろう。「まず片づけさせなければ。」という考えが先に立ち、「あと五回だけね。そしたら片づけよう。」などという応答しかしなかったのである。Tは「いやだ！」と即座に突っぱねた。後から取り戻そうとしても、もう糸はつながらなかった。

子どもの気持を受け入れることをいつも心がけていたつもりなのに、五月のこの時期、私はTのことになると「早くみんなと同じようにさせなければ。」と焦ってしま

うのだった。また、Tのことに限らず、「この頃、監視役が多いような気がする。注意して回るばかりの接し方で、遊び自体、そして子どもといることを楽しむことが少なくなってきたようだ。」と日誌に自らの反省を記していた時期でもあった。その日から、「Tくんともっと遊ぶこと」それが第一の私の目標になった。

その翌日も、お帰りの時間に呼びに行くと、Tはやはり「いやだ。」と言った。しかしその後で、「あかいおうちのおやねにのぼってからね。せんせい、ささえてよ。」と言うのである。「あれっ。いつもと違う。」と思いながら「いいよ。いいよ。」と私も心をはずませてついて行った。私の手に支えられて屋根のてっぺんまで登ったTは、すっかり満足した表情で降りてきた。そのTを両手でしっかり受け止めて、そのまま抱きかかえて部屋に入った。みんなが帰った後、まだしたくができず部屋に残っていたTに、「先生と遊びたい？」とそっと聞いてみた。Tは「うん」とうなずく。その時、ぽっと光が見えたような気がした。

Tは「だれかタオルわすれてる。」とタオルかけに残っていた一枚を私のところにすっと持ってきた。私のためにお手伝いしようとしてくれるその気持がうれしかった。そう言えば、その日の午前中の片づけの時も、Tは自分から部屋に戻ってきて、私が「Tくん力もち？」と聞くと「うん」と言って大きな積木をせっせと運んでいたっけ……。私がTの気持に沿おうとした時、Tもまた私の気持に沿おうとしてくれたのである。

それから後は、時には隣の先生の力を借りて説得したり、時には本気で叱ったりすることもしながら、少しずつお帰りの時間をみんなと過ごせるようになっていった。

ある時、みんながしたくを始めている時、ふと見るとTだけ一人すみっこにぽつんと立っている。そばに『ぐりとぐら』の絵本が置いてあった。「読んでもらいたいんだな。だけど言えないんだ。」私は予定はしていなかったけれど「今日はTくんがこれ読んでほしいんですって。」とみんなに伝えて、降園前のいっとき、『ぐりとぐ

ら』を読むことにした。話が始まると、みんなに混じってTは、身を乗り出すようにして絵に見入っていた。

それまで私は、Tを「お帰りの時間」に合わせようとばかり躍起になっていた。しかし「お帰りの時間」は子どもと共に作るもの。この時間がTにとっても楽しくなるようにすることそれが大事なんだと実感した時である。

さて、お弁当の時には、こんなことがあった。そろそろお弁当にしようとみんなが動き出している時、TとBだけが砂場から戻ってこない。様子を見に行くと、「あのね。このむし、どっかうめんの。」とのん気なことを言う。「これは長びきそうだ。」という嫌な予感がよぎる。「その虫さん、埋めちゃうの。」などとつき合いながらも、内心ハラハラしている。そのうち、とうとう「お弁当食べなくていいの？　いいんだね。」などとおどし文句まで出てくるようになった。ところが二人は「いいよ。」と全く平然としたもの。これは私の負けである。一旦部屋に引き返し、とにかく「いただきます。」をしてから、また出直すことにした。

二度目は、半ば私も昼抜きでつき合うことを覚悟していた。しかし、砂をかき出す二人の手をしばらく見ながら、つい出てきてしまったことばは「先生もまだ食べていないんだよ。一緒に食べようよ。」と、ほとんど懇願に近いものだった。その時はちょうど二人とも、やることもやり、気も納まったようで、「じゃ行こうか。」ということになった。私の隣に二人の席を作り、同じテーブルで食べた。二人は口いっぱいほおばり、顔を見合わせては、にこにこしている。私も「一緒に食べた方がいいでしょう。」と二人の顔をのぞき込みながら何だかとても楽しくなった。

数日後のお弁当の時のこと。私はTと「今日はお弁当のお片づけしようね。」と「お約束」をした。けれどTは食後、やはりいつものように放ったまま遊びにとび出して行ってしまった。部屋をひと通り整えてから「さて」とTを呼びに行くと、Tはブランコの上から私の顔を見て「だってやりたくなかったんだもん。遊びたかったん

だもん。」と言う。そこで私は「じゃ。今ならできるね。先生と一緒に行こう。」と励ますように言った。するとTは、不思議なことにさっとブランコを降りて部屋に戻っていったのである。私が手伝わなくても、Tはきれいにハンカチでお弁当を包むことができた。次の日も、やはり初めは「だってできないもん。」と片づけをしぶっていたが、「一緒にしよう。」と力を込めて声をかけると、安心したように動き始めるのだった。そばで見ていると、Tは自分で全部できる。そして私が離れようとすると「できない。」とぼやくのだった。「一緒に」ということが、どんなにTにとって大切なことかわかったような気がした。それと共に、今まで私が、Tに「させよう」とばかりしていたことにも気づいた。「一緒に」といっても、実際には直接手伝うわけではない。ただ私の方は「一緒にしよう。」という気持でそばにいて、見守っているだけである。Tはよく「できない。」ということばを口にする。それは、T自身の自信のなさの表われであると同時に、「自分と同じところに立って、心を共に動かしてくれる人」を求める声でもあったのだろう。そういう人の存在がTの支えになるのである。

一学期の最後の日。朝の短い時間だけ、三階の部屋で終業式のようなものをすることになった。時間になって声をかけると、クラスの子どもたちは慣れたものでパッと一列に並び始める。ところがTだけ一人、「いきたくない。」と頑張る。そこでとにかく他の子どもたちをみんな三階へ連れて行ってから、また迎えに降りた。Tは玄関にぽつんとしゃがみ込み、うつ向いていた。「Tくん。さくらさんだったら行けるはずだよ。Tくん大丈夫だよ。」と初めは励ましや説得に努めていたが、「いきたくない」というTの様子を見ているうちにその気持もわかるような気がしてきて、私も隣でしゃがみ込んでいた。すると、もう式が始まって、上の方から元気のいい歌声が流れてきた。その時ふと「行ける」という気がしてきて、私は「行こうよ。」とTの手を取って立ち上がった。するとTもすっと立ち上がった。歩き出してから「あれっ。やった！」と内心驚きの声を上げたのだった。

「行ける」という気がしたあの瞬間は、私の心が、Tの心の波にちょうど重なりつつあったときだったのだろう。Tと同じ空気に浸ろうとしていたからこそ働く感覚なのであろう。保育は、予測や計算の外にある場合が多い。その日の集まりでのTは落ち着いていて立派だった。

二学期。登園してくる時のTの顔が実にいい。別れ際「ママきいてよ。」というTの話にゆったりと耳を傾けている母親も変わったなと思う。「せんせいおはよう。」「せんせい、みて。」とTの方から大きな声が飛んでくるようになった。

園庭に出ると、「せんせーい。」とTが弾丸のように駆けてきて飛びついてくる、そんな時は「よーし。」と私もTをがっちり受け止めて、持ち上げたり、ぐるぐる回しをしたり、力いっぱい応えたものだ。

運動会を前に、みんなの気持が浮き立ってくる。そんな中で「Tくんね。もうおねえちゃんのここまでいけんの。」ともうすぐ駆けっこも小学生の姉に追いつくんだと張り切るTだった。

運動会当日、私は、Tがもしかしたら突然「でたくない。」と言い出すかもしれないという不安で落ち着かなかった。年中のかけっこが始まった。Tもいる。最後のグループの中で、Tはピストルの合図と共に一気に飛び出して行った。ゴールまであっという間だった。Tくんやった……。

お弁当では新しい友だちと坐るようになった。「Tくん。まっててやるの。」と食べ終わっても隣でじっと待つT。友だちといるのがうれしくてたまらないのだ。片づけだって、きちんとできる。

お帰りの時間も、クラスの中にすっかり溶け込めるようになった。「ママ。Tくんいちばんだよ。」とお帰りに並ぶときの先頭さんになって誇らしげなT。そして「はやかったね。」と両手を広げて迎える母親。そんな光景に私は「よかった。よかった。」と唯々思うのだった。

さて、三学期。Tはサッカーがしたくて仕方がない。年長さんからボールを借りては、仲間と共に園庭を駆け

回る。「はやくねんちょうさんになりたい。」そういう思いが、全身に満ちあふれている。

こうして大きく、たくましく成長してきたTだが、しかしまだ一方で、何か新しいことに直面すると、「できない」と不安がり、そこから逃げようとすることがある。やればできるのに。

これから、新しい先生と友だち関係の中で、いかにこの不安と対決し、克服していけるか、これがT自身の課題であろう。

私は、少し離れて、Tの様子を見ることにしよう。

「私の保育」ということなのに、一人の子どものことだけで終わってしまった。しかし、クラス全体の保育は、一人一人の保育から成り立っている。その子どもを考えずしては、私の保育は語れなかったのである。ここではTくんのことを書いた。他の子どもを取り挙げたら、恐らく随分と違ったものになったであろう。けれども、底の方に流れるものは共通しているに違いない。

この一年間、Tくんはじめ、子どもたちからの様々な抵抗に出会う中で、私は何度となく動揺し、無力感も味わわされてきた。しかしそれだけに、心が通じ合い、一つ乗り越えたなと感じたときの喜びはまた、たとえようがなかった。

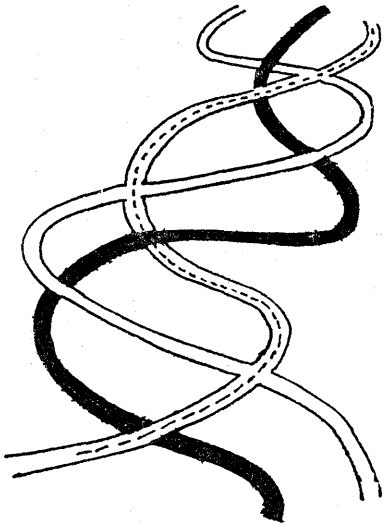
保育に一つの絶対的な方法があるわけではない。あの時うまくいったからといって、その次にまた同じやり方をただくり返してみてもうまくいかない。それは状況が変わったからというよりも、そのやり方が、その人の人間性から切り離されて、単なる方法に成り下がってしまったからではないだろうか。最初にうまくいったのは、その人が自分自身をそこに投入していたからである。それが子どもに通じたからである。

保育は、その保育者がその時、自分の全人格を相手にぶつけながら、一つ一つ産み出していくもの。私にはそう思えてならない。

保育者になって一年、私の保育は、まだ始まったばかりである。

（横浜学園付属元町幼稚園）

歌の中から



長谷川冴子

ことしは十五人の中学一、二年生が修了式を終え、いちおう現役を退いた。毎年のことながら、笑顔で始まり、涙、涙で幕を閉じる修了式には、指導者の私自身ついもらい泣きしてしまう。小学一、二年で入隊し、練習、合宿、演奏会・海外演奏旅行と、最も成長のはげしい時期に、ふつうでは考えられないような経験をし、苦しみと喜びを分ち合うのだから、多感な子供たちにとって、別れの涙はごく自然の発露だろう。

修了式恒例の修了生たち自身の構成による小さなコンサートは、半ばあたりから声をつまらせる子供が続出して、歌にならなくなってしまう。とくにことしは、合唱隊の父ともいうべきポーロ・アヌイ神父様が亡くなってから半年ということで、神父様の好きだった讃美歌『主よ私の声を聞き給

え』が歌われたが、涙は現役の小さな子供たちや父母にまで伝染して、いつもの年にもまして心に残る修了式となった。

こうして巣立っていく子供たちも、最初はただ小さく、可愛いだけ。隊員としてはまったく使いものにならない、という言い分はかわいそうだけれど、まあ、そういった状態で入隊してくる。なかには歌はあまり好きじゃないという子さえいる。音程がとれない。ピアノで示される音はわかっても、それと同じ音を声で出せない。最近の幼児音楽教室では、音名と音は熱心に教えるので、耳から理解力はおしなべてよいけれど、体を通して音を表現することができない。低音はわりあい音にしやすいが、高音になるとまったくだめ。これは、子供たちの好きなテレビ漫画やポップスなど、世の中に流れている音が、ぜんたいに狭い音域になっているせいもある。

というわけで、訓練は音をとらせることからはじまる。ピアノをたたいては声を出させる。低い音から高い音へ、音程のとれる範囲を広げていく。スポーツ選手が足腰の鍛練に階段を駆け上ったり駆け降りたりするように、音の階段を緩急さまざまに上下させる。指導者としてもいちばん忍耐力のいる時期である。上達に個人差があり、問題点も一人一人異なるが、早い子で三ヶ月、遅くても入隊後半年くらいで、声を出すための筋肉の準備がととのう。料理にたとえると、ここまでが下準備。合唱隊らしい味が出せるようになるには、このあと一年ないし二年の練習が必要だ。

技術的なことのほかに精神面の問題もある。大ホールで大勢のお客様の前で歌ったり、テレビカメラの前で歌ったりするには、精神面での強さが必要になってくる。ホルスト・シュタインというドイツの有名な指揮者の指揮で、NHK交響楽団にまじって歌わせていただいたときなど、どうにかやりおおせたものの、子供たちにかかるプレッシャーはたいへんなものがあった。そんな大きな演奏会ばかりではないけれど、定期演奏会はあるし、二年に一度は学校の夏休みを利用して海外演奏旅行にもでかける。こうしたとき役に立つのは、なによりも自立

心。団体としてのまとまりも大切だが、それだけでは大きな仕事に対処できない。とにかく自分がやらなければしょうがないんだという自立の精神を一人一人が持つことによって、はじめて団体としての美しさや魅力が生まれてくる。

自立心を養い、あくまでも個性をベースにした協調の方法を学ぶために、折にふれて合宿練習も行なっている。

合宿所は、新宿から中央線で一時間ほどの相模湖畔にある。年通算二十日間ほど、一泊二日ないし二泊三日の予定で行なわれる合宿を楽しみにしている子供は多い。朝早くから夕食後まで、練習のスケジュールはびっしりだが、ここでの生活自体は、基本的には子供たち自身にまかせられている。寝起きを管理してくれる母親はいないし、ときには上級生や友だちのいじわるにも耐えていかなければならない。きびしい練習によって合唱あるいは音楽そのものを学び、子供たち自身の管理にゆだねられたその他の時間を通して生活の技術を習得する。

はじめてのときは親が子を手離せなかったり、子供が寂しがったりで、練習どころではないといった状況に陥ることもある。しかしそうした試練を乗り越えることで自信もついてくる。中級クラス（小学三・四・五年）になると、早くステージに立ってみたいと考えはじめる。抜擢されていざ本番の練習に組みこまれると、技術も体力も自分が思ったほどではなかったことに気づき、再び自信がぐらつく。やれる↑↓できない、やりたい↑↓できないの間で心が揺れ動き、体調をくずしてしまうこともある。気持ちが悪くなって本番直前にダウンしてしまう子もいる。

高学年になると体力もつき、ステージにもなれて、実力以上の力を発揮するようになるからおもしろい。

昨年は、日生劇場二十周年公演にモーツァルトの四大オペラが上演されたが、そのうち『魔笛』に出演させていただき、これは子供たちと私自身にとって貴重な体験となった。

悪魔にとらえられ、幽閉された王女を助け出そうとす

る王子を、王女のもとへ導く三人の子供たちという役柄である。

オーディション、自主練習、ピアノ合わせまでの二ケ月間は、平常心でこなしてきた子供たちも、振り付けがはじまったとたん、とまどいはじめた。声を通してのコミュニケーションしか知らなかった彼らにとって、体を使う表現法は、違う世界のものだった。スタッフの方々のしんぼう強いご指導のおかげで、どうにかできあがってきたものの、本番一週間前になって、再び大きな難関にぶつかった。

通し稽古で、二期会や外国で活躍中の一流のソロイストたちと顔を合わせ、すっかり萎縮してしまったのである。何度もレコードを聴かせてはいたが、目のあたりに見るプロのオペラ歌手の表現力や声量の豊かさは、子供たちの想像をはるかに越えて、とてつもなく偉大で、崇高で、宇宙の星よりもっと手の届かないものに見えたらしい。一人の子供は一時的な拒唱症とでも呼ぶべき症状になり、まったく声が出なくなってしまった。こうなると指導者の暖かい励ましの言葉以外に特効薬はない。私としても薄氷を踏む思いだったけれど、心細さの片鱗でも顔に出そうものなら、動揺は子供たち全員に広がってしまう。幸いちょっとした気分転換で回復したが、本番がせまるにつれて、多かれ少なかれ、子供たちは神経過敏になっていく。からだのコンディションを気にし、ほんのちょっとしたフレーズがうまくいかないといっては、私に心配を打ち明ける。

私の子供たち（という言い方は傲慢かもしれないけれど）が、おとなと同じように悩み、考え、崖のふちを歩いていくことを、私は誇らしく感じる。そして、やりとげたあとの彼らと彼女たちの表情が、私は大好きだ。

ニューヨークのリンカーン・センターにおける演奏会、ローマのサン・ピエトロ寺院で何万人という聴衆の前で歌った一月一日のミサ、ドイツの旅、韓国での交歓演奏会、それぞれに困難や苦しみはあったが、アルバムに残るのは楽しい思い出ばかり。

子供たちにとって、海外演奏旅行の大きな楽しみの一

つはホームステイだろう。私たちは事情が許すかぎり、訪問国の合唱団の家庭にお世話になるホームステイのシステムをとっている。外国の合唱団が来たときは、私たちの家庭に泊まっていただく。

初めて訪れる国の、それも一面識もない家庭に入りこむのだから、いくら子供とはいえ、相応のマナーも必要だろうと、親はやきもきするが、子供たちはけっこううまくやってくる。きびしい練習やステージでの試練を通して、いざというときにうろたえないだけの自信を身につけていると思うのは、我田引水だろうか。

昨年の韓国では、一週間の滞在中、ホームステイは一日しかとれなかったけれど、アメリカ東部フィラデルフィア市でかつて体験した、ほとんどの家庭がプール付きという豪勢な一週間にも匹敵するくらい多くの楽しいエピソードが生まれた。

「大歓待で、夜も朝も焼肉攻めに会った」

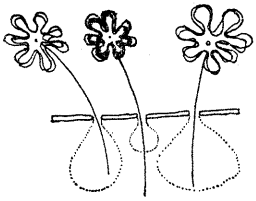
「おフロはなんと水ブロだった」

「寝るときは二人だったのに、目がさめたら六人もいっしょの部屋に寝ていた」

といった土産ばなしが、つぎつぎに私のもとへ届けられる。

子供の全人格的な成長という面から見た場合、私の与えられることは微々たるものにすぎないというあせりもあるが、それほど大げさに考えなければ、楽しい仕事だし、子供たちと共に歌い、悩み、苦しみ、笑っているうちに、私自身も少しずつ成長して、つぎの年に入隊する子供たちは、前の年の子供たちよりその分だけトクをして——そんなふうでいいのではないかなどと楽観している。

（東京少年少女合唱隊常任指揮者）



◇園長室の窓から◇

園長と移動

原口純子

○春の別れ

この四月に園長の異動があった。公立園であればやむを得ない事とはいえ、創立当初から五年間、力いっぱい努力し、やっと環境も整い、思う保育が実現しかけてきた矢先のことである。残念であり無念でもある。

教育長の辞令一本で動くことは、宮仕えの身であればいたしかたのないことと思う一方、この〝春の別れ〟は、自分でも思ってもみなかった程、深い惜別の情感におそわれた。元気でかわいい子どもたち、一生懸命やって下さった先生方、ご協力いただいた歴代のＰＴＡの会長さんやご父兄の方々、園舎内の施設、設備、園庭の一木一草にいたるまで感謝の気持と、思い出がいっぱいである。本気でこの園を愛していた。愛するものとの別れは心の底からつらく、悲しい。

○園長の役割

「園長は園を統括し……」という言葉を今まで非常に観念的に理解していたが、今回、他の園長が経営していた園に移り、自分の園を他の園長に委譲するという経験を通して、この言葉の意味を初めて内容を伴った実感として知った。すなわち、各園の実態の違い、また園の個性は、園長による園の統括のし方の差異による面が大きいのである。その意味で園はまさに園長そのものである。

文部省の定めた教育要領を基本におきながらも、保育そのもののあり様は、園長の持つ人間観、教育観により大きく異なる。さらにそこから派生する保育方法や内容、行事の持ち方、教諭の育て方、PTAの運営、園舎の使い方、予算のとり方、備品の整え方、遊具や用具の選び方、使わせ方等々、あらゆるものに園長の方針や考え方は反映され、実施されるのである。

幼稚園は小学校に比べてはるかに園長裁量の多い所である。保育の内容にしろ、方法や計画にしろ、教科書があるわけでもなく、進度割当があるわけでもない。それだけ経営に当るものとしては自由度があり、おもしろ味はあるが、経営の実態は百園百様になる。

園長の異動は、小中学校長の異動とは意味を異にする。場合によっては教育の方向も内容も、方法も根こそぎ変わるからである。一斉課題活動を主な保育方法としていた園にとっては、粘土も粘土板も、粘土ベラも各人持ちに買わせる必要がある。しかし後任の園長が自由選択活動を主体にコーナー保育をしたいと思う場合には、粘土や粘土板、ヘラが園の備品や共有物になっていないのはいかにも困るということになる。

もちろん、公立の場合、県や村から方針や指針が示される。しかし実態は極めて多様である。例えば、同じように「子どもを伸び伸び育てる」といっても、管理を最優先にし、安全と規律をきびしく要求する園長と、子どもの主体性を大切にしたいと思う園長とでは、子どもの伸びの質は自から異なるのは当然である。

公立の園の場合、地域の父母との相互信頼関係は非常に大切である。文字や算数や水泳を教えるといった目に見える効果を売り物に子どもを集めている一部の私立の園などは、そのような事に魅力を感じた親が子どもを入れているのである。これに対して、「子どもに子どもの生活をさせたい。」という即

効性のない、目に見えない保育を主張するには、それなりに父母に理解を求め、信頼関係を育てていかなければならない。したがって、親が子どもをこの園に入れてよかったと思い、地域にその保育が定着するのに、三年や五年はかかることになる。

現場の教諭はともかく、園長などというものは、よほどの理由がない限り、異動しない方がよいのはこのようなことがあるからである。

○兼務の園長

園長というのはクラスを持っているわけでもないし、牛乳を数えたり、掃除をするわけでもない。一見何もしていないようにすら見える。しかしその役割の何と大きいことか。一体これを兼務で済まされることなのだろうか。

国公立の幼稚園は全国的にも兼務の園長が多いところを見ると、文部省も、県の指導課も、園長は形だけあればよく、実質的役割について十分認識していないかのようにすら思われる。兼務で済ませるから、しっかりしたビジョンもイメージも持てず、若い主任が、自分の今までの経験を頼りに、昨年と同じことを今年も繰り返していくということになりがちである。また十分立派な園経営をしている主任や教頭であれば、兼務などやめて、園長にして、責任を担っていただけばよいのである。

幼児教育が百年以上の歴史を持ちながら、遅々として進展しないのは、他の要因もあろうが、一つには園長を兼務で済ませ、誰も本気で保育を考えようとしないからであるという気がする。本当に幼児教育が大切だと思い、幼児教育を良くしようと思うならば、公立園の園長の兼務制をやめることと、専任の園長の研修を充実することの二つが急務である。

（茨城県）

養護学校の日々

学年末から新学年度へ

津守　真

クラス編成のこと——行為と作業

学年末になると、子どもたちの生活には落ち着きが出てくるが、担任の先生たちは、年度末の母親との面接、卒業、終了などのための行事があり、他方、職員会では、新学年度へ向けての準備がはじまる。学校というのは、幼稚園から大学まで、年度末は、疲労がたまる上にあわただしい。

三月のある日、数人の子どもの母親と担任との面接のために、二時間ばかり保育時間を延長して、職員会をはじめたのは、もう暗くなるころであった。その日は、新年度のクラス編成のことを話題にすることになっていた。保育の日には、たちまち次の日へと押し出され、四月には子どもたちは新しい学年へと年を加え、新入の子どもを迎える。その態勢をととのえることは、毎日の保育を支えるために、どうしても必要なことであり、ある日限までにきめなければならない。忙しい学年末に、教師にとっては大変なことであるが、それが実質的に欠くことができないことは、だれにも共通に認識される。クラス編成とそれに伴うはなしは、教師にとっては、次の一年の自分の過ごし方をきめるから、だれもが真剣である。

それは新年度の未来のことであるけれども、現状の認

識、過去の経過を考えての上の、未来への投企であり、計画であり、実行を予想した未来像である。これからすることだから、いまの欠陥を補い、より理想に近づけたいと思う。議論はおのずからに白熱する。

この養護学校の子どもの数は、この年も次の年も、合計三十六名である。専任の担任教師は八人で、男女四人ずつである。これに非常勤が数名加わる。従来、小学部を、高学年と低学年と二クラス、それに幼稚部と三クラス編成にしていた。次の年は、幼稚部から小学部一年生に上る子どもが五名あり、小学部が三十名、幼稚部が六名になる。(このほかに、幼児を主とする、週二日のグループがある。)卒業する子どもは数名で、新たに入る子どもが同数である。

担任には、今まで受持ってきた子どもを、そのままひきつづいて持ちたいとの気持もある。また、これまでの経験で、動きの少ない子どもが安心して活動できるようにするのには、保護し落ち着いた環境を作りたいという考えがある。同時に、移動と交流の自由を確保したい。共通の理想はありながら、その実行は、あくまでも現実の諸条件に立脚してのことなので、いろいろの意見が出る。

このときから数回かけて、クラス編成と数室の整備について、次年度の方針を定めた。

大人は、話し合いによってきめたことを遂行すべく作業をはじめる。この作業は、他人と協力して目標を達成し、物の環境を作りあげる現実的行為である。この現実の基盤の上に、内なる想像の世界を含んだ保育が展開される。

クラス編成の話し合いは、このような現実の枠組に関する作業の一環であるが、それに参与する大人たちの頭の中には、ひとりひとりの子どもの内なる可能性の実現は、いかにしたら可能になるかということが考えられている。それには、想像力による飛躍をも必要とする。もしもそれを欠いたならば、現実の枠組のはなしは、利己的な自己主張が、観念論的理念の固執に堕してしまう。

想像力を本質とする子どもの世界を内に含む保育の行為は、現実の基盤の上に可能になり、現実の枠組の設定には、保育の本質的課題を見直す努力を必要としている。

これから新学年度がはじまるまで、春休みの間、大人たちは、自分たちの計画した新しい環境づくりのために、木工をし、塗装をし、文字通り作業をした。

新学期の保育

四月になって子どもたちが来はじめると、前日まで作業してつくり上げた環境とクラス編成は、大人にとっては日日の保育の行われる前提となって、保育行為の背景に退く。大人はもはや、社会的現実となったその前提を、敢て問うことはしない。その上に、いかにして最善の保育をすることができるかを考える。

子どもにとっては、三月までとは違うクラスに所属し、教室もかわり、戸迷うことがいろいろあるにちがいない。あらかじめよく考えたつもりでも、ある子どもは新しい担任に親しめないかもしれない。そのことからくる緊張や、内心の混乱もあるだろう。

そのことに應答し、新たな環境の中で子どもが自己実現できるように、保育する。新学期は、保育者は、四方八方に気を配り、体を動かす。新しい環境は、保育の行為によって子どもにとって意味あるものとなる。

停滞の日と前進の日と

新学期がはじまって最初の日、小学部に進級したSくんは、幼稚部のTくんを見ると、手に持っている自動車をとったり、押したりする。これは以前からつづいていることで、どちらにも納得がいくようにするのに、久しく心を砕いてきた。この日、Sくんはホームルームの教室がかわったり、普段より緊張も強かったのか、行動が激しかった。それまで私の傍で自動車を並べていたTくんは、私により添い、私の体からはなれなくなってしまった。私の方に、相手をかばおうとする気持がはたらくほど、もう一方の子どもは、追いかける。昨年度、Tく

んは、大人からはなれなくなった時期があったが、私は、また同じような状態になるのではないかと恐れた。そうならないようにと、この日はほとんどそのことでいろいろと試み、心を使って過した。

この新学期最初の日、昨年と同じ状況が、子どもの中にも前進の感覚なしに継続するのではないか、私共の側に、きっと何か配慮すべきことがあったのではないかと、子どもが帰ったあとを、暗く沈んだ気持であった。まだ他にもある。今年小学部に進んだOちゃんは、帰るころに、幼稚部の部屋の前で、ふと私のところに来た。最初、にこやかに見えたが、私とやりとりをしている間に、次第に気げんがわるくなり、遂には、地面に横になって、私の手で自分の顎を強く打ちはじめた。この場合は、私がつき合う仕方がわるかったとも思えない。自然に暗雲が蔽いひろがったようである。Oちゃんには、こういうことがしばしばあったが、この一年間に著しく良くなっていた。しかし、自分の顔を打ち叩くとき傍にいると、その時が長く感じられ、私の方も惨めな気持になってしまう。私は、こういう行動を、自傷行動と名付けて固定化することを避けたいと思う。いままでも、保育の行為によって、それが和らぎ、ほとんど消えてゆくのを数多く見ている。この日は、Oちゃんには、部屋や担任がかわったことなど、すぐには納得できないことがいろいろあったのだろう。だれかが、その気持により添って、一緒にその時を過さねばならない。そうすれば、きっと、環境の変化は、子どもの世界をひろげてゆく機会となるだろう。

もちろん、他の子どもたちのそれぞれを見れば、かってなかったほど好調子の子どももいるし、大人たちのこの日の体験はいろいろである。私の接する範囲は、全体の中の一部分であるが、これらのことは、保育のあと、大人たちとの間で真剣に話された。

保育の一日は、子どもが自己実現できる日となるように、大人が助けて、つくり上げる生活である。しかし、どの一日にも、子どもが十分に活動することを妨げる要

因がある。それが、環境の変化である場合もあるし、大人の短慮、子ども同士のこと、子どもの内心の問題であることもある。その点では、どの一日もひとしい。成長を妨げる要因がはたらいている中で、子どもの自己実現を助けるように、支え、励まし、周囲をととのえるのが保育の行為である。私はこのようなことを考えて、次の日を迎えた。

次の日、Tくんは、偶然の機会に、別のクラスの先生の背中におぶさり、別の教室で過した。私は、Tくんをかばう必要がないので、Sくんと落ち着いてつき合うことができた。Sくんは、ホームルームの隅でゲームをいじり、私がエース、ビースなどというと、Sくんもエース、ビースと云って、うけこたえしてあそぶ。庭に出て、他の子の持っていた金銭登録機の玩具をとり上げて、キーを押す。私は他の物を見付けて間をとりなす。私は木の葉を、四百五十円、百三十円、などと云ってわたすと、Sくんはその数には興味を示さないが、私がいくらと云うのをあてにしているみたいで、私との間に應答関係ができたように思えた。かなりの時間、それをつづけた。昼食のときには、大きいクラスの小学生たちが、桜の花の咲く裏庭にござをしいて食べる中にまじって、靴をぬいで坐って食べる。私は、よく人との應答そのものをたのしむことができた。これはよく人が求めている人間的手ごたえである。

小さい子どもが通りかかると、押し倒すこともあるが、少し距離をとって見ていると、小さい子どもの方もじきに立ち直り、双方ともに、興奮することなく、次のことに向ってゆく。

他方、Tくんの方も、自分で動いて遊んでいた。きのうは、以前と同じ状況が新しい年にも持ち越されて、少しも変化がないように思え、暗い気持になっていたが、きょうは、きのうとは違っていた。一段と変化が見られる。Sくんは他人との應答を求め、Tくんは、自分で動くことを求めている。他の子どももまじえた生活の場で、それぞれがみたされるときには、ぶつかり合うこと

も少ない。この日は、二人は別の空間にいることが多かったので、葛藤も少ないのは当然なのだが、それぞれに十分に活動する体験を積んでゆけば、互いに相手に対する余裕ができてゆくだろう。そして、そういう日には、本人も満足だろうし、以前とは違った活動が展開される。きのうの暗さに比べて、きょうは、明るい気持で一日を終えた。

ある日には、子どもに成長が見られないと思って沈んだ気持になると、次の日には、落着きと成長が見られて明るさをとりもどすという交替現象は、ときどきくりかえして保育の日日の中にあらわれるように思う。それは単に自動的反復ではなく、一日が過ぎて次の一日が来る間で、大人はその日をかえりみ、まじめに考える時がある。次の日、子どもに出会うときには、大人も変質している。この過程が、どのくらい意識的に行われるかは別として、一日と一日の間には、大人にも子どもにも、その日の体験が沈澱し、更生する時間が押しはさまれている。そのことが、翌日、子どもに出会うときに、前日とは違った作用をする。

学校にいきたがらない「パペポ」のはなし

四月のはじめは、大人にとって、不安定な緊張感がある。子どもにも、環境の変化は大きく、学校にいきたくなかったり、学校のことを考えると、気が重くなったりするだろう。学校にゆく子どもや大人をかかえている家では、春の到来にもかかわらず、家庭生活にも緊張がある。

小学校三年生のA子、二年生のP子、幼稚園年長組のY子も、それぞれに、四月の新学期を迎えた。そのころ、母親は、折にふれて、皆の生活の題材をとりいれた「パペポちゃん」の話をした。子どもたちは、その先をききたがって、母親の膝元に集まってきた。この年令の子どもたちは、自分の日常生活の体験が言語化されて語られ、それが現実には存在しない仮空の名前の主人公のこととして話されることに、強い関心を示す。このこと

は、体験の言語化という作用のみでなく、それをいろいろの角度から見直して、考えを深めることへの一歩ともいえよう。

この日、母親は、「パペポ」が学校にいかない話をした。皆の心の中に、学校生活の不安定さがあることを察したからだと思う。校長先生にお母さんが手紙をもっていくことになった。

学校にいくと、どんないいことがあるかと、「パペポ」がきく。そうすると、A子、P子、Y子みんなが、大声を出して、先を争って云う。

いろんなことをおぼえられる

給食がたべられる

友だちができる

体育の時間がおもしろい

……などなど

どれも肯定的な答えになっているが、どのひとつにも、子どもなりの悩みがある。

ある子どもは、給食を食べたくないのに、きまった時間内に全部たべなくてはならないことが苦痛である。「きょうは真中くらいだった」と家に帰るなり報告する。「もうひとりのあたしが、たべたくないっていうと、もうひとりのあたしが、たべなさいってつねるの、そうやってたべるの」と云う。食べることは子どもにとって楽しみなはずなのに、給食になると、食物の質のみでなく、管理されて同じものを食べることに、抵抗があるのではないか。学校では平気で食べているようにみえても、家に帰ると内心のことが口に出る。

ある子どもは、新学期になってから、家に帰ると、ベッドでうずくまって、同じような本をくりかえし読み、活気のない生活がずっとつづいている。そんなことが、親にも重苦しく反映して、あせりとなる。ところが、そう思って親が気を配ると、次の日には、子どもはぱっと明るくあそぶ。

ある日には、子どもは家に帰ってきたら、玄関で涙が出てきた。「日直がいやなの」と云う。仕事そのものがいやなのではなくて、近所の友だちと遊ぶ約束の時間に

間にあわないということらしい。学校の規則は、子どもに大きな力をもっている。

ある子どもは云う。「あーあ、Yちゃんが、大きくなったら、学校にいくの気の毒になっちゃった。でもそういうのは、いいわけできないよ。すぐいいわけする人もいるんだから」。学校にいくということは、子どもにとって動かしがたいことで子どもが口で抗議しても、何の効力もないということを云いたいらしい。

「パペポ」のお母さんであるパペリーナの奥さんは、校長先生に手紙を出して、こんな学校なら子どもが好きだというような学校を作ってもらうように頼む。折返し、校長先生から手紙がきて、どんな学校がいいか相談したいという。子どもたちはまた、わいわいとしゃべりはじめる。

これは、私の家での十五年前の会話である。子どもたちはそれぞれに、新学年の環境の変化に対して、学校の中で苦労していることがわかる。多かれ少なかれ、ほとんどの子どもが、この時期には、類似の状況にあるのではなかろうか。

大人もまた、新学年のはじめには、新たな生活態勢の中で、緊張が大きい。それだけに、新しい生活の流れに、自分をも子どもをも早く順応させようというあせりが大人の視点を前面に出させてしまう。この年令の子どもが、家庭で身近にいなくなると、子どもにとってあたりまえのことが見えなくなる。

四月には、学校や幼稚園では、とくに、大人は、子どもの視点と大人の視点と、複眼をもつことが必要なことを、私はいま学校の立場に身をおいて、痛感させられている。

（愛育養護学校）

いろいろなことを教えてくれる子どもたち（五）

村石京子

○春のお知らせ

寒かった冬も終って、待っていた春がやって来ました。室内での遊びの多かった三学期に比べて、子どもたちは羽ばたくように戸外へ飛び出して行きます。入園式の日に桜が咲いていない年というのは、私が勤めるようになってから初めてのことでしたが、それでもやがて陽ざしが柔かく暖かさを増してくるとともに、あちらこちらで固かった蕾が一せいに開いて色とりどりの花が咲き出しました。桜吹雪が舞い、花壇のチューリップがぐんぐんと背伸びをはじめ、タンポポはそこかしこに黄色の顔をほころばせます。この園庭の様子に、はじめは心細い表情だった新入園児たちも、いつしか気持がほぐれ、三

々五々友だちとの群をつくりはじめる四月の末ともなりました。

四才児のこの頃の保育は、集まれば蜂の巣をつついたようなにぎやかさであり、とり散らかされて足のふみ場もない程のままごとのコーナーの片づけに茫然としたり、砂あそびの後の泥だらけの洋服の着替えに私ばかりが汗だくになって奮戦したりの毎日なのです。けれど、子どもたち一人一人が思う存分あそべただろうか、幼稚園は楽しいなという思いが実感として受けとめられただろうかという新入園児を迎えたときの第一番の願いを持てばこその一日一日なのです。そして子どもたちの笑顔や歓声の中で、教師も子どもたちと共に、一日の充実感を少しずつ胸の中で味わえるようになって来たこの頃なのです。

そんな春たけなわの或る日、もうそろそろ帰りの用意をはじめなくてはと思っていた矢先、息せき切ってT夫が私を呼びに来ました。「すぐ来てちょうだい」と真剣な表情です。何か事件かなとちょっと心配しながら、T夫と一緒に走って行って見ました。彼が「こっちだよ」と言いながら連れて行ったのは、小高い丘になっている敷地で、子どもたちは「お山」と呼んでいるところです。そして前にも書きましたが、ここは私共の幼稚園の大切な雑草園なのです。ここには春の訪れと共に、タンポポ、はこべ、ひめおどりこ草、はるじおん、おおいぬのふぐり、クローバー、のぼろぎく等々が咲き乱れ、何か「心のどけき春の日に」と言った気分にひたれる場所なのです。この日の少し前、私とM先生とはこの丘へ来て「野の草花」（古矢一穂　ぶん・高森登志夫　え）の本を片手に、ここに生えているいろいろな野草の種類をあげて、その名を言いながら一時を過ごしました。先にあげた草の他にも、子どもたちがお団子屋さんをするときの大事なよもぎもあれば、子どものお米と呼んでいる稲科の植物も初夏には実ります。

そして今日、T夫が呼んだのは何かというと、「ねェ　先生、見て、お山がね、水色みたいでしょう。ほら小さい水色のお花が、ほら、ここにもあそこにも一ぱいなんだよね」と心の底から感心した顔で私に告げました。ここ数日の暖かさでパッと咲いた花によって、あちこちに水色の敷地が出来ていたのです。「本当、一ぱいね、きれいだこと！」と私も一緒に見ていると、「だからT君ね、先生にお知らせに行ったんだよ。」と嬉しそうです。「有難う、すてきな春のお知らせね。」としばらく手をつないで見ていました。小さな水色の花の群生、これを見つけたとき、子どもながらもその自然の変化に驚き、美しさに感動したのでしょう。そしてそれを一生懸命伝えてくれたその気持、T夫の心もこの花に似ていとしいと思いました。

それから数日して、朝日新聞の声欄にこの可憐な花の名前のことで、「イヌフグリはおかしい、ベロニカと呼んだらいかが？」「いや、やはりイヌフグリの方がよい。」と楽しい論争が繰りひろげられていました。それを読んだとき、あら、あら、他の社会の人の中にもこの花に関心を持つ人達がいて、同じようなことを話しているのだなと、先頃のM先生との野草散策のときのことを思い出して、おかしかったり嬉しかったりしたものです。

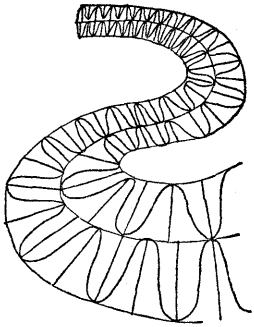
○白つめくさのこと

それから数週間たって、五月の中旬に遠足に行きました。今回は母親同士の親睦もかねて母子遠足です。たくさん歩いておべんとうにした後、草摘みや虫さがしなどしていると、H子がクローバー（白つめくさ）の花を一つ、手の平にバラバラにくずしてのせて、私のところへ持って来て言いました。「これ、白つめ草って言うのよ。」「そうね、そういう名前で言うこともあるわね。」と平凡に答える私。そしてその次にH子が言ったのはこうでした。「これ、

白いつめみたいでしょ。だから白つめくさっていう名前なのね。白いとりさんのつめみたいね。」本当に、そう言われてみると、ほぐされた白つめくさの一ひらずつの花びらは、繊細でちょうど小さな小鳥の爪のようです。その瞬間からH子の手の中にあるのは、クローバーの花ではなくて、優しい白い小鳥のつめに私には見えました。今まで何気なくクローバーの花を白つめくさとも呼ぶとだけ知っていたので、これこそ本当に子どもに教えてもらった新しい知識です。

きっとH子も優しい母から、今日教えてもらったのでしょう。私とH子の様子を見ていたH子の母親が傍へ来て、「本当に小鳥の爪みたいに見えますけど、そういうことからこの名前がついたのでしょうか？」と言われました。これから遠足は何回もあるでしょうが、H子には今日の遠足は白つめくさを知った思い出が残り、私はH子からそのことを教えてもらった思い出が残ると思います。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）



私の幼児教育論

――鏡のたわむれの中で、ひとは無限に表面にいる[1]――

亀井観一郎

四月の朝、水晶の輪舞する空の下、園庭で4才児の子達と遊んでいるとお化け屋敷に誘われる。5才児の保育室の前まで行くと戸口から、透明な陽光の降り注ぐなか、カアテンをしめて、保育者と子ども達がゆらゆらとお化けになって漂うのが見える。朝の光と仄暗い箱の中で漂う赤、黄、青の服をまとった華やかな霊。私はそのイメージに一瞬うたれる。子供達の軽やかな妖気……。

そのお化け屋敷も続くことなく、フッと一日で終った。いまは〈エメラルド。五月の露〉。4才児のクラスで魚つりをしている。画用紙に描かれた魚を積木で囲い、一人二人と糸をたれている。魚になって泳ぎまわる子もいる。

〈不思議のあまりおのが耳をかえり見れば、いつのまに鱗金光を備へてひとつの鯉魚と化しぬ。
あやしとも思はで、尾を振り鰭(ひれ)を動かして、心のま

まに逍遙す。まづ長等の山おろし、立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大湾の汀に遊べば、かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚されて、比良の高山影うつる、深き水底に潜くとすれば、かくれ堅田の魚火によるぞうつつなき。〉――夢応の鯉魚・上田秋成[2]

★

ここ数ヶ月、意味の燦めきについて考えている。子ども達の遊びにおけるイメージの背後に流れる時間の軌跡の衝突。思想の天才達はその背後に無限に浸透し、重層的に意味の迷宮を構築しつつ、解釈の彷徨をはじめる。日常の世界は鏡の前で何ら関係なく進行する。そして多分、子ども達は、存在それ自体でアリスのように鏡の向こうとこちら側を自由に往還する。

大人たちは子供が鏡の向うに隠れると、目の前にいても見えずに怒る。大人もまた子ども達が向う側へ行ってしまったことを本能的に悟るからだろうか。しかし、誰しも日常性の繰り返しに疲労した大人とて、鏡の向うにある瞬間、或いは毎夜夢の中で往還しているのではないか。幼児性が世界の根源性、本質に触れることであるとしたら、思想や芸術は幼児性を意図的に志向してきたのではないか。それ故、大人の社会は彼等にその毒をふたする為に、芸術家という椅子を与えたのだ。

子ども達がよく迷路をつくって遊ぶように彼等は自ら望んだ、言葉・イメージの迷路、〈象徴の森〉にふみ入るのである。たとえばボードレールはそれを知っていた。彼の夥しい母への書簡、日記――〈赤裸の心〉〈日箭〉は言葉そのものの意味でボードレールが幼児性――芸術家の二重の世界の緊張に耐え得たこと証している。

〈鏡を前にして生き、かつ眠らねばならぬ〉

〈毎晩のぶきみな冒険である睡眠について次のように言うことができる。すなわち、人々は毎日大胆さをもって眠りにつくが、この大胆さは、それが危険に対する無知の結果だということを知らなければどうにも理解し得ないものである。[3]〉

昼と夜、知と非知、迷宮と舗装道路。私には幼児教育とは不思議な国のアリス・リッデルのように子供と手をたずさえて、鏡のこちら側と向こうを、世界の持つ無数の側面の輝きをわがものとするため、即ち仮面をつけながら（魚族、怪獣、霊、病人、医者、父母、石、海、犬や猫、草木、昆虫に変身して）往還する行為であるように見える。それは性の差異、時空を超えた魔術的世界劇場であり、ルイス・キャロルと鉄人二十八号が、UFOに乗ったニーチェと上田秋成が、若く美しい幼稚園の先生と怪人二十面相が、水木しげるとアンドレ・ブルトンがマントをはおった織田信長とダンテが手をとりあって、ドイツ浪漫主義風オペレッタに登場する……。観客席の子ども達は驚かずに、笑いころげしばらくすると、サッとファントマのように消えてしまうのだろう。

★

子ども達が二階のテラスに椅子をならべ、雲を眺めながら、映画館ごっこをはじめた。雲の映画館という事例を或る先生から聞いた。空雲、木などを誰しも時間を凝縮させて視たことがあるに違いない。（何年か前、4才の子とペープ・サートをしていたら、画用紙を青くぬり、〝海〟という役が登場してきて驚いた。）私の園の屋上は見晴しがよく、夕方丘の向うに赤橙色の陽が沈み、低い丘の木々が暗灰色にしげる。朝は、光を受けて木々が一斉に歌う。

雲の映画館で、空を眺めていた子ども達も自然のもたらす感性の雨にうたれたに違いない。このようにして、一本の木、一片の雲と交感し、存在が向う側から一人の人間に訪れるのを待つこと。自分が木となるまで見続けること。或いは対話をかわすこと。葉群のヴォリューム、マッス、枝の力学の精緻なバランス。フォルム。知覚世界を探求することは、終りなき冒険である。煙草の灰、消しゴム、コップ、全ては美しい。子どもが、じっと立ちどまって見ている時、どのような知覚体験をしているのであろうか。何故、教育の世界では、ねらい、到達度

等と硬直した大人の頭をますます硬化させる努力をするのだろうか。何故、感受性の研究をしないのだろう。現象界を構築する存在の大きさ、そのはかなさ、色彩、質量に直接触れるのは、感性である。それを通して我々は自已の真の時間、即ち存在との認識の歴史である論理構造――思想に近づくことが出来るのではないか。

保育の過程も同様であると思う。

★

子どもは大人よりも性について自由であるようだ。彼等の両性具有的な魅力、その両性を超えて浮遊するような不思議さ。ドイツの美術史家のグスタフ・ルネ・ホッケは「迷宮としての世界」――マニエリスム美術――のなかで次のように述べる。「〈未開人の〉魔術的世界観念にあってはいうまでもなく、また〈歴史的諸民族の魔術的世界観念のなかでも〈両性具有者〉であるヘルマフロディトウスは一つの宇宙的原像になっている。〉〈ヘルマフロディトウスはすぐれて par excellence 芸術的な性〉である。（中略）レオナルドの「ジョコンダ」（モナリザのこと筆者註）がこの点で世界史的な寓意像と呼ばれる。彼女のなか〈もしくは彼のなか〉には、〈男性のもつ頭脳的な権威〉と〈魅惑的な婦人〉のもつ官能性とが一体化しているのだ。「聖ヨハネ像」（レオナルドの作品）では性は一つの〈謎〉となっている。つまりレオナルドは〈アニミズム的な〉明暗法を発見したのである。[4]」

★

子ども達の軽やかな、疾走する両性具有的宇宙！ そういえば幼稚園の園長先生にも、あの「ジョコンダ」の如き謎めくえまいを浮べている人達がいる。可愛いい男の子に女装させる大人達もいる。一見すると男の子のような女の子もいるではないか。これらは全て存在の大なる神秘であり、パンドラの箱から飛び出したユウモラスな小悪魔達だ。その悪魔の末裔であるオスカア・ワイル

ドは呟く。

〈人間を善いのと悪いのに分けるなんて、馬鹿げています。人間は魅力があるか退屈かですよ〉。――ウィンダミア卿夫人の扇[5]――

オスカア・ワイルドは、百合の花を道に敷き、ロンドンにサラ・ヴェルナアルを迎えた。そういえば、おしべとめしべのある花達も両性具有であった。

★

数年前の夏の朝、I少年と小さな丘の上で虫をとっていると、突然、かなぶんが羽をならして飛び去った。その迫力にあ然としていると、すぐにヘリコプターが飛んできた。その瞬間、私はかなぶんとヘリコプターは親戚であると確信した。それに気付いた時、私は嬉々としてIに伝えると彼も納得し笑いころげた。

最近I少年と3才の弟Tは、対になった言葉の戯れを繰り返して喜ぶ。

I「ラリコ」

T「アッピキ」

I「ジンジンジンパァン」

T「ゴリラッゴッゴオウ」

ラリ湖はIが考えた幻想の湖であり、二人の間では、意味をかろうじてまとわりつかせた一種のかけ声めいたものである。

言葉遊びは恐しいと思う。音声を媒介に突然、異次元へ飛ぶことができるからだ。4・5才の子が言葉自体を物として戯れているのを見ると、シュール・レアリストの自動記述を思ったりする。時として意味なき言葉を喜ぶ子どもの不気味さよ。

〈一八七四年七月のある午後、折から散歩の途中にあったアリスの生みの親の脳裡に、ふとつぎのような一行の誌句が浮かんだ、という――「さよう、スナークはたしかにブージャムだったのだ」。皆目意味の判らぬまま、彼はそれをただちにメモに書きとめ、数日後、それを最終行とするアナペスト格の四行詩をこしらえ、そしてそ

の二年後のひまひま、いかにも大団円めいたその尤もらしい部分に到りつく各段をしだいに書きつないでいって、ついにそれを最終節とするル章第百四十一節に及ぶ詩編を完成させた。〉―「スナーク」狩りへの試み・沢崎順之助[6]。恐るべき永遠少年よ。

言葉・言霊。この種の文章を書こうとすると鏡である原稿用紙の前で私は文体を探す。文体こそは言葉という宇宙の誕生の仕方、言葉という思想そのものだからだ。それは、子供が遊ぶとき自分のイメージや身体に最も合った遊びかたを必然的につくりだすのに似ている。心と身体のイメージの行動の文体。子供が自由に遊べないのは自分の文体が見つからないからであろうか。もしかすると、幼児教育の仕事は大人と子供が互いに相手の宇宙の文体を引用しつつ巨大な星雲を創造することであるかもしれぬ。

（寺尾第二幼稚園）

注

（1）宮川淳『紙片と眼差とのあいだに』小沢書店 一九七四

（2）上田秋成・鵜月洋訳註『雨月物語』角川書店 昭和三十四年

（3）矢内原伊作訳『ボードレール全集』人文書院 一九六三

（4）グスタフ・ルネ・ホッケ著・種村季弘・矢川澄子訳『迷宮としての世界――マニエリスム美術』美術出版社 一九六六

（5）スーザン・ソンタグ著・高橋康也・出淵博・由良君美・海老根宏・河村錠一郎・喜志哲雄訳『反解釈』竹内書店 一九七一

（6）沢崎順之助「『スナーク』狩りへの試み」別冊現代詩手帖第二号・ルイス・キャロル思潮社 一九七二

アメリカと日本の幼児教育を見学して

劉　青　霞

訳・李恵加

私は幼児教育の現場で働いてもう十三年になります。最近の五年間に、三回、外国で幼児教育を見学しました。一回目は東南アジアの九ケ国、二回目はアメリカのカリフォルニアで、教育様式の違う幼稚園十六ケ所を見学しました。そして、今回は、北カリフォルニアを訪問して、中国語海外教育について講演した際、いくつかの幼稚園を見学させていただきました。例えば、学問研究を重んずるスタンフォード大学附属幼稚園とディアンチァ大学附属幼稚園、二ケ国語を併用する幼稚園、幼稚園から小学校までのモンテッソリー学校です。帰る途中、日本によって、お茶の水女子大学附属幼稚園を見学しました。これらは個人的な訪問でしたので、ほとんどの幼稚園で午前九時から午後五時まで、二日間にわたって、ゆっくり、詳しく観察することができました。私はそれらの幼

児教育の精神を深く研究したいと望んでいます。

アメリカのスタンホード大学附属幼稚園とディアンチァ大学附属幼稚園を見学した時、カリキュラム、環境設備、教具の使用法、幼児の個別的記録と特殊児童の指導、教師の研修、両親相談、母親参加……などが私の幼稚園で行なっていることと同じであることを見いだしました。それらの大学の教授たちは、私と話し合った際、遠い所の国も同じことを考えて行なっていることを知り、大へんよろこんでいらっしゃいました。

日本に滞在した間に、私はお茶の水女子大学附属幼稚園とまんとみ幼稚園を見学しましたが、この二つの幼稚園は誘導保育と自然に帰ることを教育趣旨として教えています。子どもたちは朝登園してから帰るまで、自分の興味によって、好きな所で、やりたいことをやっています。例えば、戸外には、泥をいじる、火をつけて水を沸かせる。バスケットボールをする、鉄棒にぶらさがる、大工ごっこやなわとびや滑り台で遊ぶなど、様々な遊びをしている子どもがいます。また、室内には、ママゴト、トランポリン、お絵かき、粘土などをやっている子ども、あるいは、なにもやっていない子どももいます。子どもたちは自らグループを形成したり、また個別的に活動したりしています。つまり、戸外と室内活動を同時に行ない、時間割と年齢別クラス編成を廃しているのです。ダイナミックな活動とスタティックな活動を同時に行ない、子どもたちは子どもたちの世界の中で、自由自在に活動し、十分に満喫しています。

このような幼稚園において、先生の役割は、いつでもどこでも子どもたちのそばにいるということです。やさしい母親のように絶えず暖かい手を延ばして、黙って子どもたちを支え、慰めと指導を与えるのです。表面的には、子どもに何かを教えようとする先生の意志は見られませんし、子どもたちに何かをやらせようとすることもありませ

ん。しかし、子どもたちが登園する前、先生はそれぞれの子どもに即して、すべてのことを考えて、材料と環境などを用意しています。そして、子どもに自由に「いるかいらないか」という選択をさせています。私は、先生と先生との間、先生と子どもとの間の関係は見えない糸のように互いに無理なくつながっていることを感じました。子どもたちは毎日このような自由保育の環境の中で自ら学んでいるのです。

自由遊び保育において、幼稚園はさながら小さな社会であり、子どもたちは人間関係、社会規範を学んでいきます。仲間や大人との間で、仲良くし、友達を尊敬し、友達から尊敬されていくことの大切さを認識し、さらに、独立して、能動的に、問題を解決する能力を学んでいきます。子どもの脳細胞はこのように絶えず刺激し、考え分析し、判断していくことの中で成熟していきます。そうすると、情緒的な発達のバランスが得られ、知能が開発され、更に、自信と成就感を得て、「自我」という概念がうまく形成されていきます。従って、このような幼児教育こそ、真実の教育であるとはいえないでしょうか。

今回、ディアンチャ大学附属幼稚園を見学した際、幼児教育の三つの様式についてのディスカッションに参加させていただきました。それは幼児教育学専攻の大学生三十名が三つの組に分かれて、幼児教育の三つの様式について、調査、比較、整理し、最後に指導教授が結論を下すというものでした。

(1)伝統的教育法……知識をつめこむことを重んずるものであり、温和な性質の子どもには適しているが、そうでない子どもにおいては、社会的技能を培うことに欠けるという失敗をおこしやすい。

(2)モンテッソリー教育法……その幼児教育精神は、感覚教育を重んじ、子ども自分自身のテンポ

で「自発的」に学ぶということであるから、自信と成就感を得やすい。しかし、子どもの能力の程度に生じる差異が著しい。

(3)オープンエデュケーション教育法……集団と個別の活動は同じ重要性を持つ。自由時間において、子どもの社会性は培われ、小グループの学習活動によって、子どものすべての基本的な能力は養われる。一対一の個別的指導では、子ども自身のテンポで学ばせていく。この教育法には、多くの方法があり、子どもに様々な選択をさせていく。このような教育を受けて、子どもは基本的な生活態度と柔軟性を持つ人格が養われる。

様々な教育様式には長所もあり、短所もあります。社会において、いろいろな人に適用するためには、様々な教育様式が存在する価値があります。私はどのような教育様式が一番よいかということは断言いたしません。両親と先生たちは自分自身の基本的な信念によって、子どもに適する教育様式を選ぶのが一番よいことであると思っています。

私は、アメリカと日本を見学した、この五十日間を通して、精神的緊張を感じましたが、幼児教育の領域のなかで、突然、雲が消えて、青い空が見えるように理解できる何かを感じました。また、アメリカ、日本、中国それぞれの社会において、文化の相違を深く体験しました。今後、それらの問題について、皆様に詳しくうかがっていきたいと望んでいます。

(台湾新店　明徳幼稚園)

〔『明徳通信25』1984—25明徳幼稚園発行より〕

黄色い兎

——黒ちゃんのお葬式——

蕪木寿江

「白い箱はさびしい」と言って、折紙でお花を切って貼りました。赤や黄色やピンクのお花が一ぺんに咲いて賑やかになりました。兎の好物の人参や、蠟燭の灯ったクリスマスツリーまで銘々が思い思いのものを作って、周りに貼っていきました。でも、黒ちゃん一人入れるのは可愛想だといって白い兎を箱の中に描きました、ここでしばらくもめていました。描かない方がいいという意見もありました。

黒ちゃんは五匹生まれた兎の一匹です。ほかの兄弟よりも一番早く穴から出てきました。「どの兎がお母さんなのかわからない」「毛が抜けている兎だよ」「自分の毛でフワフワベットをつくるんだって」「大人がみんなおいしい餌を食べちゃうよ」「子どもにとっておかないよ」「お父さんいるのかな」「大人が踏んずけちゃうー」「早

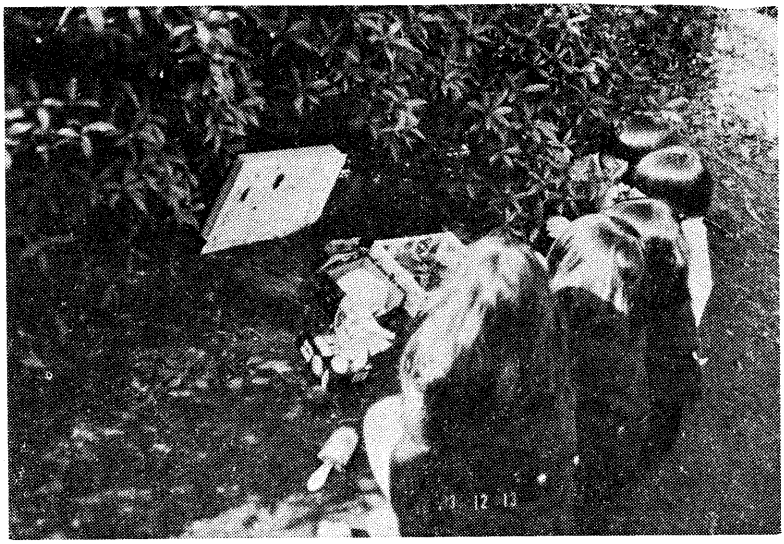
く抱っこしたいな」

黒ちゃんが死んだ十二月十三日の火曜日は、お日様が照っているのに寒い日でした。園庭にオルガンを出して、お葬式をしました。讃美歌三〇六番「主よみもとに近づかん」の流れる中で、手に手に黄菊の花びらを持った子ども達の長い列がいつの間にかできていました。砂場のカップにお線香をたてて、その香の中で一人一人が黒ちゃんにお別れをしました「つめたいね」とさわっている子ども、静かに撫でている子ども、いつまでも目をつむって手を合わせている子ども、カップのご馳走が次から次から運ばれて机の上は一杯になりました。

「先生、先生、黒ちゃんが黄色い兎になったよ」と、大声で話をする子どもにつられて、「ほんとだ、黄色いお花になったー」と、とたんに笑い声がはじけて飛んで行きました。

「穴は広く掘ってね、黒ちゃんが出てくるのに窮屈だからね」とシャベルで裏庭にお墓を掘っている先生に子どもが囁やきました。どこから持ってきたのか大きめの丸い石が置かれ、その石に紙の首飾りを巻き、棒切れにまだ固い蕾の沈丁花の枝を折ってはセロテープでとめて挿し、「黒ちゃん、もうじきお花が咲くわよ」と話しかけたり、砂のケーキやつるつるカップ、ジュースにおだんごなど、かわるがわる並べ、ふだん誰もいない北側のお庭も子ども達の声がいつまでも聞こえていました。黒ちゃんがお腹がすくといけないからと言っては、冬草の中に僅かに生えているたんぽぽの葉を取っては、供え、それが減っていたと言っては喜び、天国から幼稚園にくるんだと信じ、朝はバスから降りるとカバンをしょったままそこに走り、帰りは必ず「さようなら」と言いに行ってはきょうの日が終って行きました。幼稚園の話を滅多にしない子が、「兎のお葬式をしたんだよ」と父親にも話し、びっくりしたと言って子どもに連れられて見えたお母様もいらっしゃいました。

殆んどが核家族で生活している現在、身近に「死」というものにふれたこともなく、死の悲しみも荘厳さも知らず、従って生きることの意義もわからないまま過ぎて



▲黒ちゃんの墓

いくことが多い現在、黒ちゃんの死を通して、生命のいとおしさ、大切さをしみじみと味わい、子ども達の中から学んだことでした。

黒ちゃんは死んで「ポチ」という名前を貰いました。「ポチのはか」と書いたボール紙の立て札を立てました。

さて、ポチという戒名をもらったばかりか黒ちゃんは、たくさんのお手紙をもらいました。最後に、そのいくつかを紹介させていただきます。

＊　＊

〈1〉　▼表

▼裏

沢みほ

ポチへ。

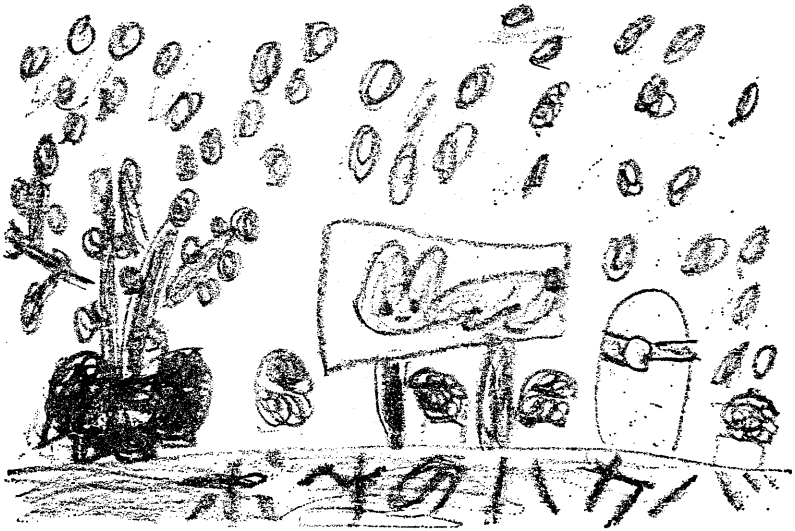
ポチ、おげんきですか。
てんごくは、どんなところですか。いってみたいです。おともだちは、たくさんできましたか。おともだちとなかよくしてね。
こんど、キャベツを、もってくるからね。おともだちと、けんかをしないでげんきでいてね。ポチ[illegible]ばいばい。

〈2〉　▼表

▼裏

たのしそうなもげんきです
ぽちおともだち
きです
まほもげんき
んもげんきです
げんきです
ともえちゃんも
もげんきです
くろちゃんもしろちゃん
つくりしてね
すげてごくでゆ
ぽちへ　ぽちおげんきで

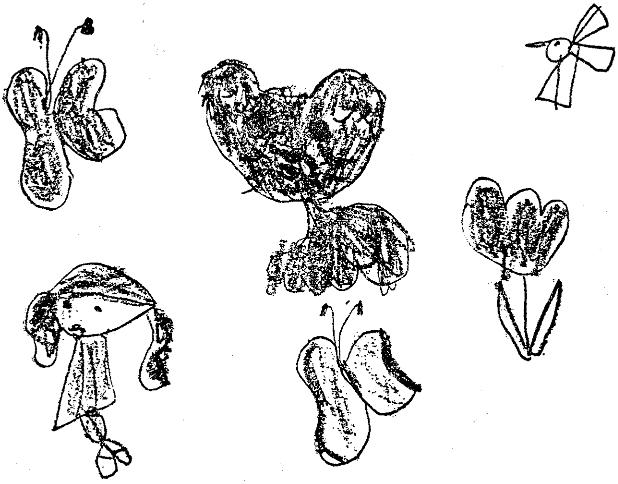
〈3〉　▼表



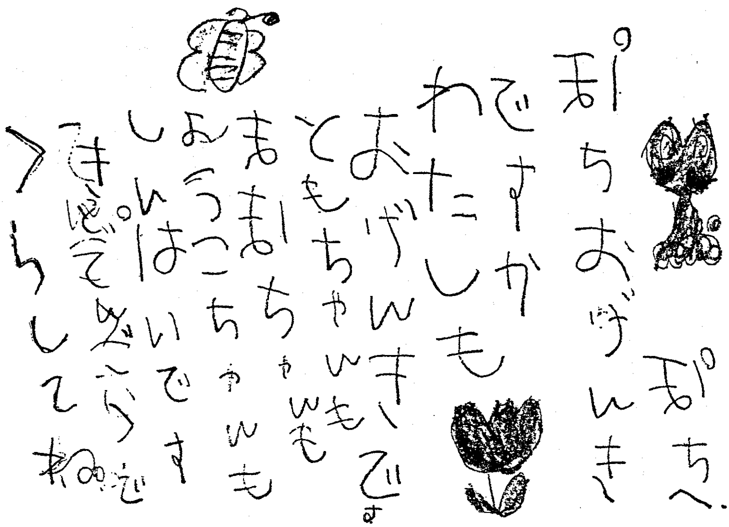
▼裏

あさこ
まってて
ますから
かってきたあげ
こんどプレゼント
できましたか
おともだちがしっぱい
ポチおげんきですか。
さようなら　ポチ

〈4〉　▼表



▼裏



〈5〉　▼表

▼裏

おおいしまゆ。ぶんとおげんきですかおともだちわすれましたか。みんなちゃんもしんぱいです。まゆちゃんもしんぱいです。あっちゃんもしんぱいですかがらくもんせもしもしんぱいですでんごくでたのしくくらしてください

ニュージーランドにおける
就学前教育の歴史ならびに現状（十）

松川由紀子

(7) 就学前教育研究

これまでこの国の就学前教育の現状についてさまざまな側面から書いてきた。今回は研究動向について若干記したいと思う。就学前教育研究を中心に述べたいが、就学前に限定しないで広い意味の幼児期を対象にした研究もかなりみられるので、厳密には「就学前」ではないこともある。また、研究動向といっても、筆者には包括的に述べられるだけの力量はないので、実際にはその一端にふれるにすぎない。これらの点をあらかじめ了承しておいていただきたい。

この国の就学前教育研究は、他の多くの国と同様に、それほど以前から活発に行なわれていたのではないが、就学前教育サービスの拡大とともに研究の必要性が叫ばれるようになり、最近は活発になされているように思う。その幕あけは、教育省の幼児教育官（当時）クリスティソン女史（I. Christison）が一九六五年にヴィクトリア大学に「ニュージーランドにおける就学前教育サービスの概観」と題する教育学修士論文を提出した時とされている(97)。当時、プレイセンター連合やフリーキンダー

ガルテン連盟は就学前教育研究の必要性を強調していたが、これら就学前教育関係団体の要望をニュージーランド教育研究諮問機関（以下、諮問機関と略す）が受けて、関係者と話し合い、そして六七年末にはオークランド大学心理講師（当時）のバーニー博士に就学前教育サービスに関する組織的研究を依頼した[98]。さまざまな就学前教育、保育団体がこの研究に協力し、数年をかけて全国的なサービスの現状が明らかにされ、七五年には大量のデータを整理した研究報告書として『誰が就学前サービスを受けるのか』と題する本が出版された[99]。諮問機関は就学前教育研究を支援するために七〇年に研究奨励金制度を開始した。六九年にヴィクトリア大学に「個人、地域ならびに認可任意協会――二ヵ所のプレイセンターのメンバーに関する研究」と題する教育学修士を提出したマクドナルド女史（M. McDonald）が、その最初の奨学金を獲得した。彼女はマオリの母親が就学前教育をどのように考え、かかわっているのかについてフィールド調査をした。その研究は七三年に『マオリの母親と就学前教育』と題する報告書として出版された[100]。この本は、本格的な就学前教育研究の出版物として最初のもので、高い評価を受けた。そして、マクドナルド女史は、翌七四年に諮問機関に設置された幼児部門にフルタイムの研究員として任命され、以後、活発に研究を続けている。

七〇年代前半には、大学においても就学前教育に関する研究が（やっと）目立つようになった。また、七〇年代中葉以降いくつかの重要な幼児教育研究大会や会議が開催され、研究は次第に活発に展開されるようになった。研究の多くは、大学のスタッフあるいは（その指導を受けた）学生によってなされている[101]。大学を中心にした研究は、心理学、教育学、社会学、医学的側面など多方面からアプローチされているのであるが、実際の幼児の教育にかかわっている親や教師の目に、残念ながら、あまりとどいていない。そのため、情報の提供という面に問題を残している。こうした大学における研究とともに、ある意味で大変に重要（ユニーク）な研究が、前述の諮問機関幼児部門においてなされていると思われるので、以下、ここのスタッフによる研究について記述してみたい[102]。

諮問機関は、一九三四年に設立された非営利研究組織

で、政府助成金、さまざまな団体からの委託あるいは助成金、そして出版部門の売上げなどを財源としている。ここの幼児部門は、七四年にマクドナルド女史が研究員に就任して以来、若干増員され、八四年三月現在、四名の研究者（フルタイム、パートタイムをあわせて）がさまざまな研究プロジェクトに取り組んでいる。諮問機関副所長のマクドナルド女史、幼児部門責任者のミード女史、パートタイム研究員のレニックス女史とローズマギー女史の四名である。彼女たちは研究コンサルタントとして活動したり、委託を受けた研究を遂行したり、研究に関する情報を提供したり、研究論文を書いたり、セミナーを開いたりする。勿論、自身の研究プロジェクトに基づいた取り組みも活発にする。彼女たちによって、これまでさまざまな研究がなされてきた。幼児をもつ家庭への援助、プレイセンターにおけるヘルパー、幼児教育プログラム、性別役割固定化、五歳児入学、父親の役割、言語発達などに関する研究である。彼女たちは、親や教師と協力して、親や教師を援助する内容の研究を目的にしている。単に研究のための研究ではない。また、彼女たちの多くはヴィクトリア大学やリントン教育大学で講義をもっている。

マクドナルド女史は、七七年に「四歳児のマオリの言語ならびに思考の外観」に関する研究で博士号を得たが、婦人問題や幼児教育・保育サービスなどに関する研究にも関心をもち、最近は、障害幼児教育研究プロジェクトに取り組んでいる。ミード女史は、六八年に「ニュージーランドにおけるフリーキンダーガルテンとプレイセンターの組織的研究」で博士号を得、最近は、幼児教育をもつ家庭への援助、幼児教育プログラム、性別役割などに関する研究をしている。レニック女史は、豊かな教職経験のある母親として教師と親をつなぐ側面に最も関心をもち、子ども向けの本を書いたり、両親向けのスライドを作成したり、子どもの教育における親の役割ならびにそれに対する教師のかかわり方、就学前から小学校への移行問題などに関する研究をしている。つい最近（八四年）、この移行問題プロジェクトをまとめて『五歳で学校へ――家庭あるいは就学前機関から学校への移行』という本を出版した[109]。ローズマギー女史は、幼児部門の最も新しいメンバーで、家庭問題、児童の発達、父親の役割、カウセリングに関心をもち、最近、家庭ネ

ットワーク研究の一環として子育ての援助の現状に関する調査を始めている。

ここでは、これらの研究について、すべてにわたってさらに詳しく述べることはできない。すでにマクドナルド女史とミード女史の研究については本連載でもそのいくつかを参考にしてきたので、また、ローズマギー女史の主要な研究は現在進行中であるので、ここでは、レニック女史の最新の研究報告書『五歳で学校へ』について若干紹介したいと思う。就学前から小学校への移行問題に関するプロジェクトは、諮問機関幼児部門の重要な研究プロジェクトのひとつとして数年間にわたって取り組まれたもので、すべての子どもをもつ親にとって関心のある問題にスポットをあてている。小学校への入学は、この国では日本のような一斉ではなく、五歳の誕生日を迎えた者がひとりひとりその翌日から新入生クラスに入っていく。新入生のクラスは、五歳から七歳すぎまでの子どもたちの学ぶジュニアクラスの一部で、期間、教育方法、教育内容などの具体的な運営は各学校によってさまざまである。このジュニアクラスは、日本で言えば、幼稚園・保育所の四歳児クラスの一部と五歳児クラスならびに小学校一学年にあたるものである。幼児教育と初等教育が混在しているといえよう。その点から、私たち日本の幼児教育関係者にとっても興味のあるところではないだろうか。

この移行問題プロジェクトは七七年に開始された。レニック女史は、多くの新入生クラスや就学前機関を訪ね、教師や親、子どもたちと小学校入学に関してさまざまな角度から積極的に話し合った後に、①新入生クラスの教師。②キンダーガルテンやプレイセンターなどの教師、指導者、③キンダーガルテンやプレイセンターなどに通う子どもをもつ親、それぞれ三〇〇名計九〇〇名を対象に、移行に関する事柄についてできるだけ多くの点から明らかにするために、アンケート調査をしている。また、この時期の子どもをもつ親三〇名に入学前後の子どもの様子、経験について日記をつけてもらい、個々の事例を集めている。そして、『五歳で学校へ』が出版されるまでに、さまざまな機会、対象に研究結果(の一部)がすでに示され、討論されている。そのため、この『五歳で学校へ』は全体的な最終報告として包括的な内容になっていて、必ずしも詳細な結果がすべて示されている

わけではない。レニック女史は、関係する親や教師が互いに話し合う機会を積極的にもつことを期待して、そのための材料（話題）をこのプロジェクトの結果から提供しているのである。

調査され、報告されている事柄は、①就学前教育の長所と短所、②地域における就学前と新入生クラスとの連絡の度合、③入学年齢、④個人別入学あるいは一斉入学の相対的な利点、⑤入学日の親の出席、⑥入学時の情報伝達、⑦小学校への適応にとって望ましい能力と特性、⑧親の入学準備、⑨子どもの入学への期待、⑩入学時に生ずる親と子どもの問題、⑪両親参加、⑫親と就学前教師のもつ新入生クラスの印象、⑬就学前教師・指導者と新入生クラスの間の仕事の差異、⑭就学前教育の管理（小学校の一部となるべきか独立した管理下にあるべきか）、⑮就学前幼児のテレビ視聴に対する教師の態度、⑯自らの自律性に対する教師の見解、⑰教育対象の子どもの年齢と教師養成、⑱新入生を教えること、あるいは就学前機関で働くことの満足ならびに不満、などについてである。次に、調査結果のいくつかをまとめてみる。

。多くの子どもたちは入学前に小学校を訪ね、期待をもって入学するのだが、学校生活は拘束が多いために、かなりの子どもにとって適応することはたやすいことではない。

。五歳児入学の制度は多くの者に支持されているが、入学の方法については意見が分れている。

。小学校は就学前教育にみられるほど親の参加をとりいれていないので、入学時にかなりの親はその差異にとまどい、子どもからの自立という気持を味わう。

。親は入学日に若干教室にとどまるが、ペアレントヘルパー制をとりいれている新入生クラスは約三分の一のため、子どもの学校生活の様子をもっと知りたいと願う親が目立つ。

。一般に、新入生クラスの教師はキンダーガルテンに対しては好意的な見方をするが、保育センターに対しては否定的な見方をしている。

。一般に、新入生クラスの教師は（三歳から七歳すぎまで一貫した教育ができるように）就学前教育が小学校教育の一部となることを望んでいるが、キンダーガルテンやプレイセンターなどの教師や親は現行

制度を支持している。

○入学準備、教育プログラム、就学前と小学校との連絡など多くの事柄についてはさまざまな見解がみられる。

○新入生を教えること、諮問機関で働くことは疲労をともなうものであるが、多くの者は仕事に誇りを感じている。

この調査結果は、移行にあたって考えてみなければならない問題をあらためて提示しているといえよう。私たちにとっても関心のある事柄ではないだろうか。この結果をみていると、五歳の誕生日を迎えたばかりの子どもにとって突然に午後三時までの学校生活を過ごすことは大変な重圧であろう、と容易に想像される。就学前教育の場で主流である自由な遊び、活動は小学校ではかなり制限されるので、教育内容、教育方法上の連絡がうまくいっていないと学校生活への適応はむつかしいだろう。この点から、今後、ジュニアクラスにおける教育プログラムの現状について明らかにしていく必要があるように思う。この移行問題は、個々の点では差異があるだろうが、わが国にもみられることは言うまでもないことである。

以上、政策当局幼児部門の研究について若干記してきた。既述したように、ここの研究者たちは親や教師を援助するためにこうした研究をし、いつも情報提供をし、研究相談にも応じる。「親を援助する」という姿勢は、この国の就学前教育を支える基本的な原理のひとつであるが、それが研究面にもみられることは大変に興味深いことに思える。

これまで、第六稿から五回にわたって、この国の就学前教育について、(1)一九七〇年代以降の就学前教育、(2)就学前教育プログラム、(3)スタッフの養成、(4)マオリと就学前教育、(5)家庭教育、(6)就学前教育行政、(7)就学前教育研究の各側面からかなり具体的にふれてきた。まだまだ見落しがあるだろうが、おおまかな現状については記述したように思う。

おわりに

このシリーズでは、十回にわたって、ニュージーランドの就学前教育の歴史と現状について記してきた。研究

文献の収集にどうしても限度があるために、また現在、急速に新しい動きが始まっているために、満足のいくような包括的な記述になっていないと思うが、ほとんどわが国に知られていないこの国の就学前教育についてかなり詳しく紹介してきたように思う。今後とも文献を収集し、新しい動きにも注目していきたいと思う。具体的には、この国のキンダーガルテン創設時の史料をさらに詳しく検討してその事情を世界の幼児教育の歴史のなかに位置づけること、現在のマオリ独自の就学前教育運動ならびにそれに続くマオリ語と英語の二国教育問題、保育政策の進展、その他(104)。さらに、就学年齢がわが国の幼稚園・保育所の四歳児クラスの途中にあたるので、積極的にこの国の小学校ジュニアクラスにおける幼児教育、初等教育について検討していかなければ、わが国の幼児教育を考えていくうえで十分な参考にはならないのではないかと思う(105)。

最後に、この研究にあたって非常に多くの方々からきわめてあたたかいご協力をいただいたことに心から謝意を表したい。とても全員の名前を記すことはできないが、とりわけクライストチャーチ教育大学のハギット先生をはじめ、ウェリントンのニュージーランド教育研究諮問機関、さまざまな就学前教育関係団体ならびに教育省の大変に友好的なご支援に対して深く感謝したいと思う。

(山口女子大学)

註

(97) Geraldine McDonald; 'Early Childhood Research in New Zealand', set 75(1), Wellington: New Zealand Council for Educational Research, 1975. なお、クリスティソン女史は、一九五三年に教育省幼児教育官に任命されて以来十一年間ずっと国内のキンダーガルテンを歩き回り、教師に自由保育プログラムを具体的に提示して指導助言をしてきたが、単に経験だけではなく、経験を理論づけていく研究の重要性を感じ、大学院修士課程に入って研究し、前記の論文を書きあげ、その後長い間指導的な幼児教育官として精力的に活躍し、つい最近退職をした。筆者は八四年三月にウェリントンの女史の自宅を訪ねてその半生を話していただいたが、幼児教育実践の経験、教師養成の経験とともに自身が継続して理論的研究をしていくことの重要性を強調しておられた（この会見はテープレコーダーに録音され、筆者がテープを保持している）。

(98) John Watson; 'Developing a Research Programme in New Zealand on Early Childhood Education', in Brian O'Rourke and John Clough (eds.), Early Childhood in New Zealand, Heinemann, Auckland, 1978, p. 270.

(99) Barney; op. cit.

(100) 注(71)の出版物。

(101) David Barney; 'Status and Research on Education in Pre-Schools', in Geraldine McDonald and Peter Dinniss (eds.), Young Children and Early Childhood Services: Some New Zealand Research, Wellington: New Zealand Council for Educational Research, 1978, p. 22. ならびに Anne Meade; New Zealand Early Childhood Care and Education Bibliography: 1965—1978, Wellington: New Zealand Council for Educational Research, 1979.

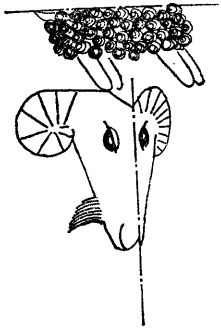
(102) 以下の記述は、八四年三月に筆者がウェリントンのニュージーランド教育研究諮問機関を再訪した時にいただいたパンフレットをもとにしている。

(103) Margery Renwick; To School at Five: The Transition from Home or Pre-School to School, Wellington: New Zealand Council for Educational Research, 1984.

(104) なお、保育センター保育者（指導者）の就業前の養成は、やっと八四年二月より教育大学において開始された。ただし、養成期間は一年間で保育助手の資格が与えられるだけで、ひき続き就業後の現職養成コースを受けなければ保育者資格は得られないので、保育者養成の質の向上はなお急務といえよう。

(105) 最近、ジュニアクラスにおいてはオープンクラス制をとり入れるところが増えてきている。オープンクラスは一見したところキンダーガルテンとあまり差がみられないが、よく見るといろいろなコーナーでグループ学習がなされていることがわかる。オープンクラス制は、ひとりひとりの子どもの進度、興味を大切にしながら遊び中心の生活から学習生活へと移行していくのに適切な教育方法として注目されているので、今後、検討してみたいと思う。

＝了＝



東京の港区、アメリカ大使館やホテルオークラに近い、高台の一隅に霊南坂教会がありました。設計者は、明治建築史に輝かしい名を記されている辰野金吾。尖塔の鐘楼が美しいシルエットを描く、レンガ建築で、内部は木材が優しくたっぷり用いられ、大中寅二指揮する讃美歌合唱は、澄明で温かみのある声の調べを響かせて、秀逸であったといいます。かの、山口百恵・三浦友和の結婚式が行なわれた教会として、記憶にある方も多いかと思います。そして、つい最近、かつて津守真・房江御夫妻が、何とこの教会で挙式をあげられたことを知り、びっくりした次第です。

ウェディングドレスといっしょに、ステキな花婿さんを借りてきて、霊南坂教会で結婚式をあげておきたいと、切迫して思い込み出したのは、この教会が老朽化して取り壊しが決定してからのことです。残念ながら、手を尽くしても、レンタルの花婿さんも見つからず、物語の世界のように美しい、あの教会堂での、感動の嵐が吹きわたる結婚式は、夢のままに終りました。

さて、教会に付属している幼稚園も、今回、移転することになりました。引っ越しの記を、赤羽美代子先生に寄せていただきましたが、古い教会堂なきあと、霊南坂教会にまして、霊南坂幼稚園の、この赤羽先生こそが、霊南坂の魅力をたたえた、神につかわせられた恩寵の人となるのではないでしょうか。

「いやだわぁ、ちょっとちょっと、やめて、ほんとにやめて……」という声が聞こえてきそうですが、「よろこびの人は子どもらのための小さき太陽である。明るさを頒ち、温かみを伝え、生命を力づけ、生長を育てる……」という倉橋惣三の言葉が想い起こされてくる〝小さき太陽〟の人なのです。私は、時折、日光浴をさせていただいております。（皆川）

幼児の教育　第八十三巻　第九号
九月号　©　定価三〇〇円
昭和五十九年八月二十五日　印刷
昭和五十九年九月一日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本田和子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九―一九六四〇番

◉本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします
※万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

改訂日私幼式幼児運動能力簡易検査法による

保育に生かす運動能力検査

日本私立幼稚園連合会・編

新刊!!

遊びを通して幼児の運動能力を育てよう。

幼児は「遊び」を通して基本的なからだの動きを身につけていきます。本書は、幼児がその年齢なりに運動能力が発達しているかを判定する検査法をわかりやすく解説しています。そして検査結果を保育にどう結びつけ生かしていくか、さまざまの運動あそびをイラスト入りで紹介しています。

B５判・136頁・定価1,300円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

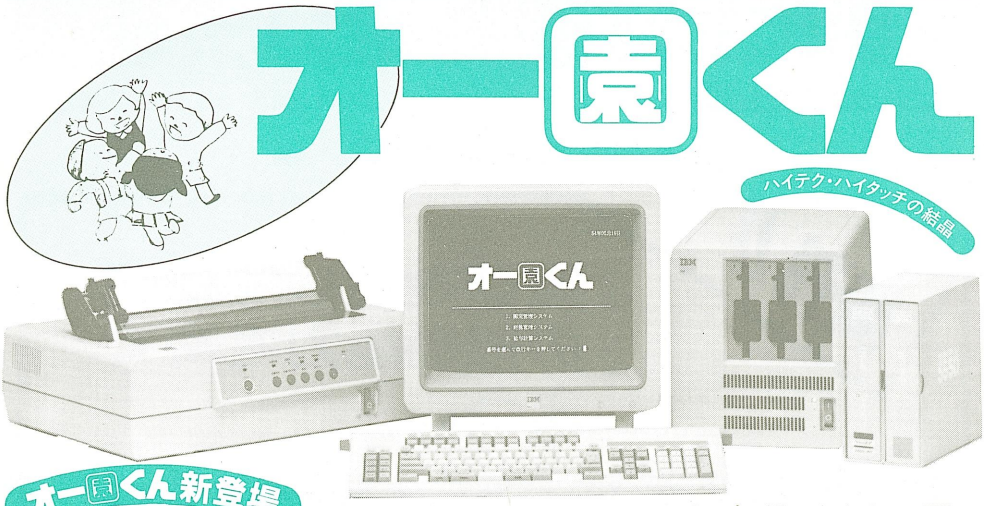
子どもの心を大切にする
キンダーブックの フレーベル館

近代的な園経営の実現をお約束します！

幼稚園・保育園用 フレーベル コンピュータ システム

オー園くん

ハイテク・ハイタッチの結晶

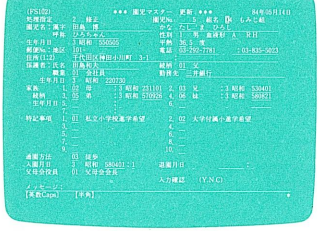


オー園くん新登場

省力化でゆとりの園経営を実現します。本格的コンピュータ・システム オー園くん

OA（オフィス・オートメーション）時代といわれます。しかし、オートメーションが求められているのは企業のオフィスだけではありません。園児の減少、人件費・施設維持費の上昇などの状況の変化は、幼稚園・保育園に経営の効率化、事務のオートメーション化を求めています。
経営の近代化がはかれればそれだけ幼児教育の充実、園のイメージアップなどに力を注ぐことができるようになります。日ごろから先生がたと親しくおつきあいさせていただいているフレーベル館では、みなさまの園経営を積極的にお手伝いできるコンピュータ・システムとして「オー園くん」を開発いたしましたので、ぜひご活用ください。

専門知識はいりません。初めての方もカンタンに操作できます。



- 操作の方法は画面が指示してくれます。
- まちがっても安心、画面が教えてくれます。
- わずかな練習で操作を覚えてしまいます。

- 目にやさしいグリーンイエローの画面。

☆'83「日経・年間優秀製品賞」〝最優秀賞〟受賞。

IBMマルチステーション 5550

- コンピュータはIBMマルチステーション5550。
- 園用ソフトウェアはフレーベル館・凸版印刷・トッパンムーアビジネスシステムズの共同開発。

オー園くんは、月々わずか4万円（5年リース）から。

すぐあなたの園の優秀なスタッフとして活躍します。

タイプ	価格	リース価格
オー園くん―タイプⅠ	¥1,820,000	月40,000円（5年）
オー園くん―タイプⅡ	¥2,026,000	月44,500円（5年）

オー園くん仕様

			オー園くんタイプⅠ	オー園くんタイプⅡ
ハード	システム・ユニット		16ビット、マイクロ・プロセッサー 主記憶容量 ROM16KB RAM384KB ディスケット3ドライブ	
	ディスプレイ	画面サイズ	12インチ	15インチ
		文字構成	16×16ドット	24×24ドット
	プリンタ		16×16ドット	24×24ドット
	キーボード		JIS標準ひらがな配列	
ソフト	園用ソフト	園児管理システム	名簿管理、出欠管理、体位・体力測定管理、おもいでファイル、修了台帳、未就園児名簿、宛名印刷、園児情報検索等	
		財務管理システム	資金収支日計表、試算表、資金収支計算書、現金出納帳、当座預金出納帳、総勘定元帳等（幼稚園用・保育園用）	
		給与管理システム	月次給与、賞与、年末調整	
	ワープロシステム		文節変換、訂正、挿入、削除、移動、枠あけ、罫線、倍角・半角文字等の各種機能	

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心を大切にする キンダーブックの フレーベル館